第30回　神奈川県遺跡調査・研究発表会

発表要旨

2006年11月19日（日）　於：横浜市開港記念会館

主催　神奈川県考古学会

後援　神奈川県教育委員会

横浜市教育委員会

開　催　要　項

開 催 日　2006年11月19日（日）
会　　場　横浜市開港記念会館

〔開　会　挨　拶〕9：30～9：35

〔発　　表〕9：35～10：05　平塚市　万田貝殻坂遺跡（まんだかいがらさか）　戸田哲也氏・中村哲也氏

10：05～10：35　小田原市　千代南原遺跡第ＸＸⅢ地点・第ＸＸⅣ地点（ちよみなみばら／にじゅうさん／にじゅうよん）　渡辺千尋氏

10：35～11：05　鎌倉市　若宮大路周辺遺跡群（わかみやおおじ）　宮田　眞氏

〔休　　憩〕11：05～11：10

〔記　念　講　演〕11：10～12：00　『第30回　神奈川県遺跡調査・研究発表会』を迎えて　神奈川県考古学会　会長　寺田兼方先生

〔昼　休　み〕12：00～13：00

〔テーマ発表趣旨説明〕13：00～13：05　テーマ発表「神奈川の遺跡調査をめぐる30年」

〔発　　表〕13：05～13：35　近　代　野内秀明氏
13：35～14：05　近　世　山口剛志氏
14：05～14：35　中　世　小林康幸氏
14：35～15：05　古　代　大上周三氏

〔休　　憩〕15：05～15：30

〔発　　表〕15：30～16：00　古墳時代　明石　新氏
16：00～16：30　弥生時代　立花　実氏
16：30～17：00　縄文時代　川口徳治朗氏
17：00～17：30　旧石器時代　鈴木次郎氏

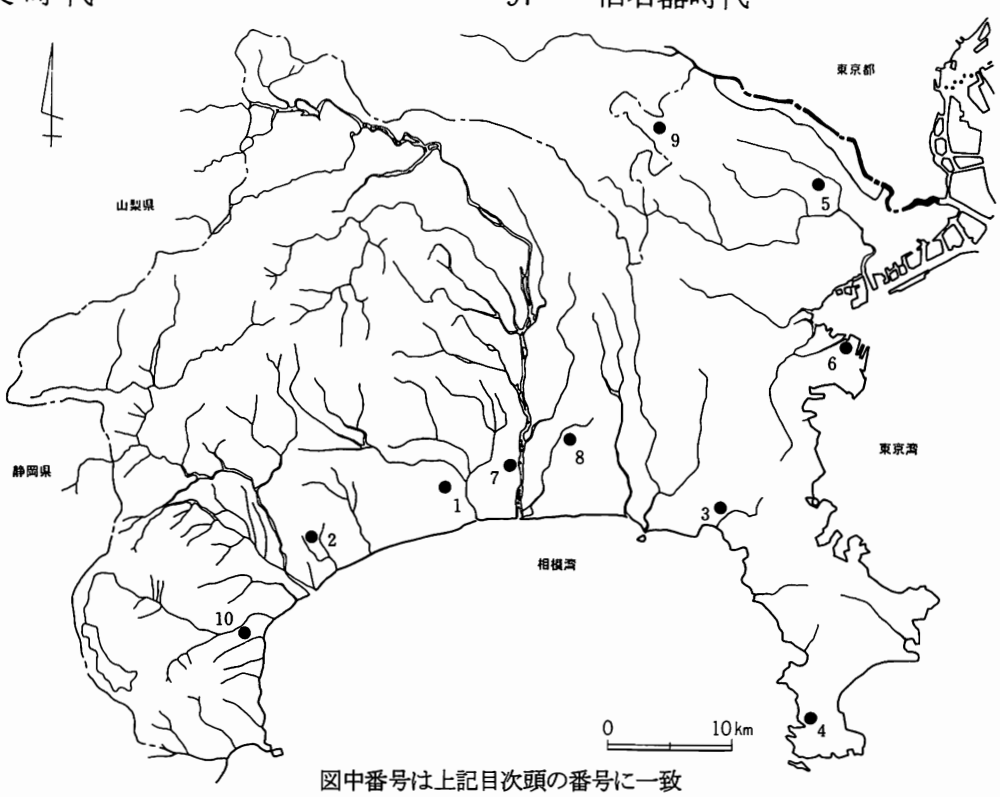
〔閉　会　挨　拶〕17：30～17：35

〔図　書　交　換　会〕9：30～15：00　横浜市開港記念会館　４号室

表　紙：第１・10・20回の発表要旨
中扉①：会場発表３遺跡の掲載写真より
中扉②：県内市町村別発表件数
裏表紙：第１回調査・研究発表会で報告された藤沢市川名新林右遺跡出土の環頭把頭（藤沢市文化財調査報告第15集より）

目　次

〔記　念　講　演〕神奈川県考古学会　会長　寺田　兼方 先生
『第30回　神奈川県遺跡調査・研究発表会』を迎えて ---------- 1
〔調査・研究会場発表〕
1．平 塚 市　万田貝殻坂遺跡 ---------- 3
2．小田原市　千代南原遺跡第ＸＸⅢ地点・第ＸＸⅣ地点 ---------- 7
3．鎌 倉 市　若宮大路周辺遺跡群 ---------- 13
〔調査・研究誌上発表〕
4．三 浦 市　がんだ畑遺跡 ---------- 17
5．横 浜 市　下組東貝塚 ---------- 21
6．横 浜 市　元町貝塚 ---------- 25
7．平 塚 市　湘南新道関連遺跡 ---------- 29
8．茅ヶ崎市　小出川河川改修関連遺跡群 ---------- 33
9．川 崎 市　上麻生日光台遺跡 ---------- 37
10．小田原市　(仮)早川石切丁場群 ---------- 43
〔テ　ー　マ　発　表〕
近　　代 ---------- 47　　近　　世 ---------- 55
中　　世 ---------- 64　　古　　代 ---------- 72
古 墳 時 代 ---------- 80　　弥 生 時 代 ---------- 88
縄 文 時 代 ---------- 97　　旧石器時代 ---------- 105



図中番号は上記目次頭の番号に一致

記念講演　『第30回　神奈川県遺跡調査・研究発表会』を迎えて

神奈川県考古学会　会長　寺田（てらだ）　兼方（かねみち）

1．はじめに

「神奈川県遺跡調査・研究発表会」が第30回目を迎えた本日の記念講演として、当初は『神奈川の考古学のあゆみ』といった演題を与えられたが、振り返ってみると平成15(2003)年３月23日に開催された平成14(2002)年度の考古学講座で、『学史を語る－学史を踏まえた最新の研究－』というテーマで「神奈川の考古学史」が見事に纏められており、１２７ページにも及ぶ立派な冊子まで完成しているので、それから数年しか経過していない現在、再度神奈川の考古学史を纏めるのは「屋上屋を架す」ことになり、これに代えてこの30年間、神奈川県内の考古学的な発掘調査の成果を、研究者や関心を抱く県民に広く公開して提供し続けてきた「神奈川県遺跡調査・研究発表会」という自主的・奉仕的な事業に焦点を絞って振り返ってみたいと思う。

「神奈川県遺跡調査・研究発表会」は、毎年過去一年間に神奈川県内で発掘調査が行われた主要な遺跡の調査概要を報告する機会であり、今では「神奈川県考古学会」が主催する行事として誰もが受け止めている。そして、この30回に及ぶ遺跡発表会で報告された遺跡数は、誌上発表も含めると、実に３６１遺跡に達しており、常に最新の発掘調査の成果が、研究者や関心を寄せている県民に広く提供されてきたことは、誠に重要な意義がある。と同時に、これからも末長くこの事業が「神奈川県考古学会」の主要行事として継続されることを、多数の方々が期待されているものと信じている。

2．「神奈川考古同人会」と「神奈川県遺跡調査・研究発表会」

さて、「第１回　神奈川県遺跡調査・研究発表会」を開催するに当たって、昭和52(1977)年６月26日に「横浜市開港記念会館」に於いて「第１回　神奈川県遺跡調査・研究発表会準備委員会」が招集された。第１回の準備委員として招かれたのは、県内各地で発掘調査を手掛けている第一線の研究者であった。即ち、赤星直忠・井上義弘・伊東秀吉・大三輪龍彦・岡本　勇・小川裕久・金子皓彦・神沢勇一・久保常晴・小出義治・杉山博久・寺田兼方・日野一郎・三上次男・村田文夫・持田春吉（50音順・敬称略）の16氏であった。この「準備委員会」の事務局は、「神奈川考古同人会」（代表　小川裕久氏）が担当していた。小川氏を中心とする「神奈川考古同人会」では、神奈川県全体を纏めた「遺跡発表会」の実現を構想し、上述の「準備委員会」を組織して具体化する方式を採用した。実は、「神奈川考古同人会」は、神奈川で考古学研究を志す若い研究者が集まって、研究と自己啓発を目的として結成され、その成果を発表していく研究誌として『神奈川考古』の発行が企画された。『神奈川考古　第１号』は昭和51(1976)年５月に発行されており、平成18(2006)年５月には『神奈川考古　第42号』(30周年記念号)が発行されて、現在の会員数は78名に達している。このように、「神奈川県遺跡調査・研究発表会」は、準備委員を委嘱された方々と「神奈川考古同人会」の若い研究者の力に支えられて、着実に恒例の行事として発展していった。この間、第３回遺跡発表会に際しては、準備委員の一人であった久保常晴先生

が逝去され、翌年小宮恒雄先生を新たに準備委員に迎えた。約 10 年後の第 12 回遺跡発表会に際しては、重鎮の三上次男先生が他界された。こうして、「神奈川県考古学会」が発足する前年の平成２(1990)年９月 30 日に開催された「第 14 回　神奈川県遺跡調査・研究発表会」まで、上記の 15～16 名の準備委員が毎回集まって企画し、「神奈川考古同人会」のメンバーが手足となって事務局を務めて、遺跡発表会が積み重ねられてきた。第１回～第４回、及び第７回の遺跡発表会は、「横浜市開港記念会館」で開催されており、今回の第 30 回までの内、横浜市開港記念会館で開催されたのは 10 回に及び、「神奈川県遺跡調査・研究発表会」にとっては、当会場は最も「縁(ゆかり)のある会場」である。

３.「神奈川県考古学会」と「神奈川県遺跡調査・研究発表会」

平成３(1991)年４月 27 日、横浜市開港記念会館に於いて「神奈川県考古学会」の設立総会が開催され、当日は２００名を越える参会者の満場の拍手によって「神奈川県考古学会」の設立が承認された。初代会長に選出された故日野一郎先生は、『考古かながわ』(第１号) の巻頭文で、「ここに神奈川県考古学会を設立して発表会を組織的に、永続的に運営し、調査、研究の成果を高めることと致しました。」と宣言されている。今までは、準備委員会と神奈川考古同人会の事務局が主体となって、細々とした組織に頼って運営されてきた「神奈川県遺跡調査・研究発表会」が、平成３(1991)年９月 29 日に開催された第 15 回目からは「神奈川県考古学会主催」の行事として位置付けられることになり、４００名を越える多数の会員に支えられて、今日では本会の「顔」として定着してきたと言える。

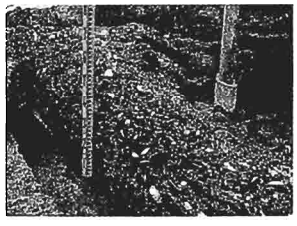
「神奈川県遺跡調査・研究発表会」が抱える今後の課題としては、今までにも発表会担当の内部でも取り上げられたり、また定期的に開かれる幹事会や役員会でも屡討議されたことがある。

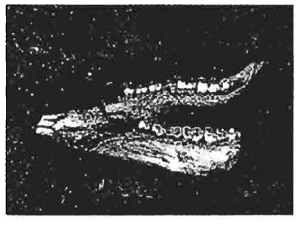
その一つは、発表会の題には「調査の発表」と同格で「研究の発表」が掲げられているのであるから、「研究発表」を盛り込む方向を是非とも模索する必要がある。二つ目は、最近では県内各地の地方公共団体で、「遺跡調査発表会」が開かれるようになって来ており、「神奈川県考古学会」が開催する遺跡発表会と発表遺跡が重複するものが少なくないことである。この「重複を避けること」と、「研究発表を増やすこと」とは、一つの方向として模索できそうな感じがする。

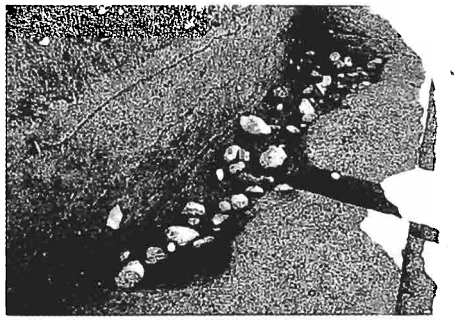
三つ目の課題は、開催地の問題である。従来も、横浜市開港記念会館だけでなく、県内各地で会場が確保できる都市で開催したことがある。例えば、第８回から第 15 回の遺跡発表会は、列記すると藤沢・大和・横須賀・大和・平塚・川崎・相模原・横浜の順で開催されている。その後、第 16 回から第 19 回は、開港記念会館・秦野・開港記念会館・川崎の順で一回交代で開港記念会館に戻っている。しかし、再び第 20 回から第 26 回は、茅ヶ崎・小田原・鎌倉・伊勢原・鶴見・平塚・横須賀の順で各地を巡っており、第 27 回以降は開港記念会館が中心となって回帰している。従って、開催地について一つの方針が確認されている訳ではない。しかし、神奈川県の遺跡発表会が県内各地の都市で開催される場合には、開催地の市町村が主催する遺跡発表会の発表遺跡と、神奈川県考古学会の遺跡発表会の発表遺跡が重複しないような配慮は可能なように思われる。

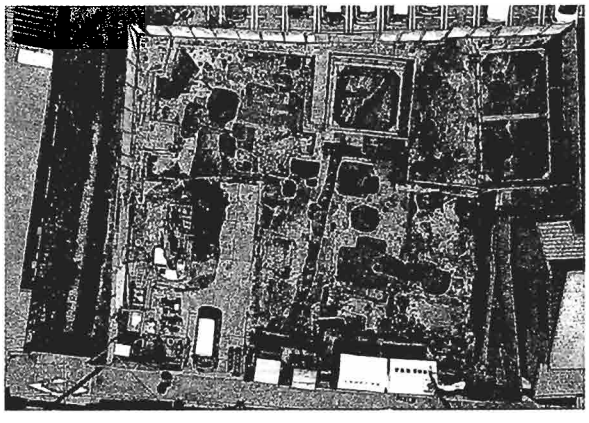
ここに全ての課題を網羅して考える余裕はないが、今後も発表会担当役員、役員会、幹事会などで充分に検討・工夫をして、神奈川県内の考古学研究・調査に資するような「遺跡調査・研究発表会」を育てていかなければならない。それには、会員の皆々様の絶大なるご協力とご支援が必要である。

調 査 ・ 研 究 発 表









平塚市　万田貝殻坂貝塚（まんだかいがらさかかいづか）

―縄文時代前期の貝塚―

戸田（とだ）　哲也（てつや）・中村（なかむら）　哲也（てつや）

所 在 地　平塚市万田493番地他
調査機関　玉川文化財研究所
調査担当　戸田哲也・中村哲也・石川真紀
調査原因　市営住宅建替事業に伴う事前調査
調査期間　2005年8月8日～2006年2月28日
調査面積　1,200㎡

1．遺跡の立地

万田貝殻坂貝塚は平塚市南西部に所在する。地形的には金目川下流右岸域の大磯丘陵東端部北側斜面に形成された扇状地上に立地し、遺跡北方から東方には沖積低地が広がる。調査地点は北方に急激に傾斜する崖地となっている。標高は崖地上部で約18m、下部で約16m、北方沖積低地との比高差は5m前後を測る。現相模湾の海岸線からの直線距離は約2.5㎞である。

周辺に所在する同時期貝塚としては、本遺跡西方約8.5㎞の小田原市羽根尾貝塚、東方約8.5㎞の茅ヶ崎市西方貝塚があげられる。羽根尾貝塚では関山Ⅰ式期～諸磯式期の泥炭質遺物包含層内より、ダンベイキシャゴ、ヤマトシジミを主体とする関山Ⅱ式期の貝層が、西方貝塚では黒浜式期の住居よりヤマトシジミを主体とする貝層が発見されている。

2．調査に至る経緯と経過

今回の調査は市営住宅建替事業に伴って実施されたものである。事業予定地北側の市道拡幅部分は、学史に著名な万田貝殻坂貝塚推定地に該当するため、2005年8月8日から2006年2月28日の期間で玉川文化財研究所が事前調査を行った。

第1図　調査位置図（1/25,000）

3．調査の概要

今回の調査によって縄文時代前期関山末～黒浜式期に属する貝層5ヶ所、および縄文時代中～後期の貝層1ヶ所、遺物集中8ヶ所が発見された。出土遺物は土器、土製品、石器、石製品、骨角器、貝製品、貝類、動物遺存体などで、総量は遺物収納箱で約210箱分、回収した貝層サンプルは土嚢袋約550袋分を数える。

層位的には砂礫層を間層として、下層は前期遺物群および貝層が検出されたやや泥炭質の遺物包含層、上層には亜塊状を呈する中～後期の遺物包含層が堆積する（第3図）。以下に時期別に遺跡の概要を述べる。

・下層（縄文時代前期）

調査区東側を中心に遺物包含層が検出され、さらに北向き斜面下部より5ヶ所の貝層が発見された（貝層2～6）。いずれの貝層も北側の市道下に広く展開するものと推定されるため、斜面地に堆積した貝層の上端部（標高約14.8～15.1m）から比高差約0.5～0.7mの上部傾斜部分が検出されたと考えられる。他時期遺物の混在は認められず、さらに上下の土層は無遺物層となっているため、これらは当時の包含層堆積を保って

いる可能性が高い。

これらの貝層を構成する貝類は湾部砂底に生息するチョウセンハマグリ、ダンベイキシャゴを主体とし、他にはシジミ、カキ、サルボウ、アカニシなどが確認されている。動物遺存体は陸棲哺乳類・海棲哺乳類・魚類・鳥類・爬虫類・両生類が出土した。骨種同定作業中のため、現段階での所見ではあるが、陸棲哺乳類はイノシシ、シカが主体的で、他にイヌ、ウサギ、サルなど、海棲哺乳類はクジラ、イルカ、魚類ではボラ、カツオが特に多く、他にタイ、スズキ、サメ、エイ、アジ、サバ、イワシなど、鳥類はウミウなど、爬虫類はヘビ、ウミガメ、両生類はカエルが確認されている。

出土土器群の主体をなすものは黒浜式土器で、関山式土器は極めて少量である。また客体的に東海系上ノ坊式土器が共伴し、さらに中部系釈迦堂Ｚ３式土器なども含まれる。石器は礫核石器類（磨石、敲石、礫器、石錘、石皿など）が多数を占めるが、石鏃、石匙などの剥片小形石器類も微量出土している。骨角器は釣針、刺突具、篦状製品、垂飾未製品などがみられる。貝製品はいずれもサルボウの腹部に大きく穿孔が施されたものである。明確な用途は特定し難い。

・上層（縄文時代中～後期）

調査区中央部を中心に大きく４ヶ所の遺物包含層が検出され、貝層１ヶ所（貝層１）、遺物集中８ヶ所が確認された。土層は亜塊状を呈しており、さらに多時期の土器群が同一層位に混在しているため、これらの遺物包含層は二次堆積によって形成された可能性が高い。

出土した土器群は中期清水台式から後期堀之内式と多時期にわたり、特に堀之内１式土器群の出土量は突出する。また、ごく微量ではあるが前期土器群（黒浜～諸磯など）も混在する。土製品には土偶、土器片錘、円盤状土製品などがみられる。

石器は石鏃、石匙、石錘、打製石斧、磨製石斧、磨石、敲石、石皿、石棒など多種にわたり、特に石錘の出土量は卓越する。動物遺存体も多数出土しており、海棲哺乳類ではクジラ、イルカなど、陸棲哺乳類ではシカ、イノシシなど、魚類ではボラ、カツオ、タイ、サメなどが確認されている。貝層を構成する貝類はチョウセンハマグリ、ダンベイキシャゴを主体とする。

４．まとめ

今回の万田貝殻坂貝塚の調査により、前期関山末～黒浜式期の貝層を含む遺物包含層が検出され、さらにそれらと明らかな層位差を持って中～後期の濃密な遺物包含層が発見された。内容については前述の通りで、質・量ともに非常に充実したものであり、加えてこれらは先人達の調査成果を追認することも可能な学史的にも非常に重要な資料と考えられる。

過去の調査成果と比較してみると、今回の調査で発見された前期貝層２～４は人類学雑誌 40－5（1925 山崎・八幡・中谷ほか）で報告された３ヶ所の貝層、中～後期遺物包含層は貝層の上位に堆積する多量の遺物を包含する「楔状に入込んだ深い黒土」に該当するものと推定される。さらに、貝層５は日野一郎らにより発見された貝層（日野 1987）に該当する可能性が高い。

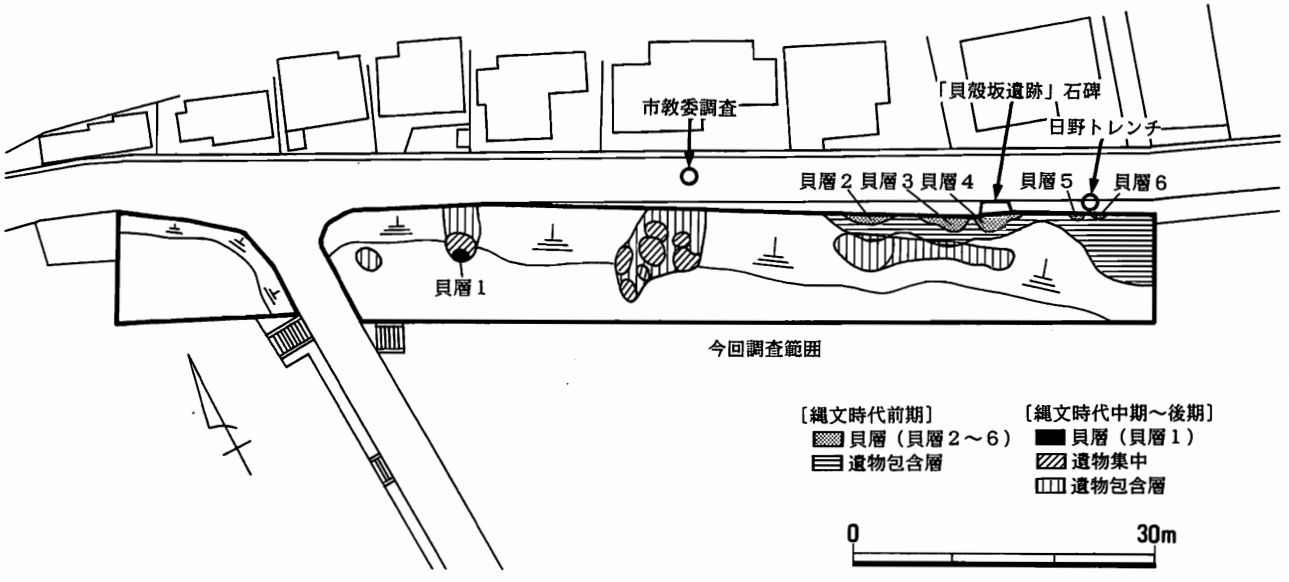
なお、これら遺物群の供給源となる生活遺構群については、周辺遺跡を含めて現時点では未発見であり、今後の重要な検討課題となるが、調査地点南方の平坦面は近・現代の大規模な削平に因るものであり、既に当該期遺構の大半は消滅した可能性も考えられる。

今後は前述の先人達の調査成果に留意しつつ、周辺遺跡、特に相模湾沿岸域の同時期貝塚である羽根尾貝塚、西方貝塚との比較・検討などを加え、さらに考古学的分析とともに自然化学分析による周辺自然環境の復元などを行い、遺跡の実態を明らかにしていきたい。

文　献

山崎直方・八幡一郎・中谷治宇二郎ほか　1925「相模国中郡旭村万田貝殻坂遺跡－層位的に時代別を示す石器時代遺跡－」『人類学雑誌』40－５

日野一郎　1987「万田貝塚発掘調査略報」『平塚市文化財調査報告書』22　平塚市教育委員会

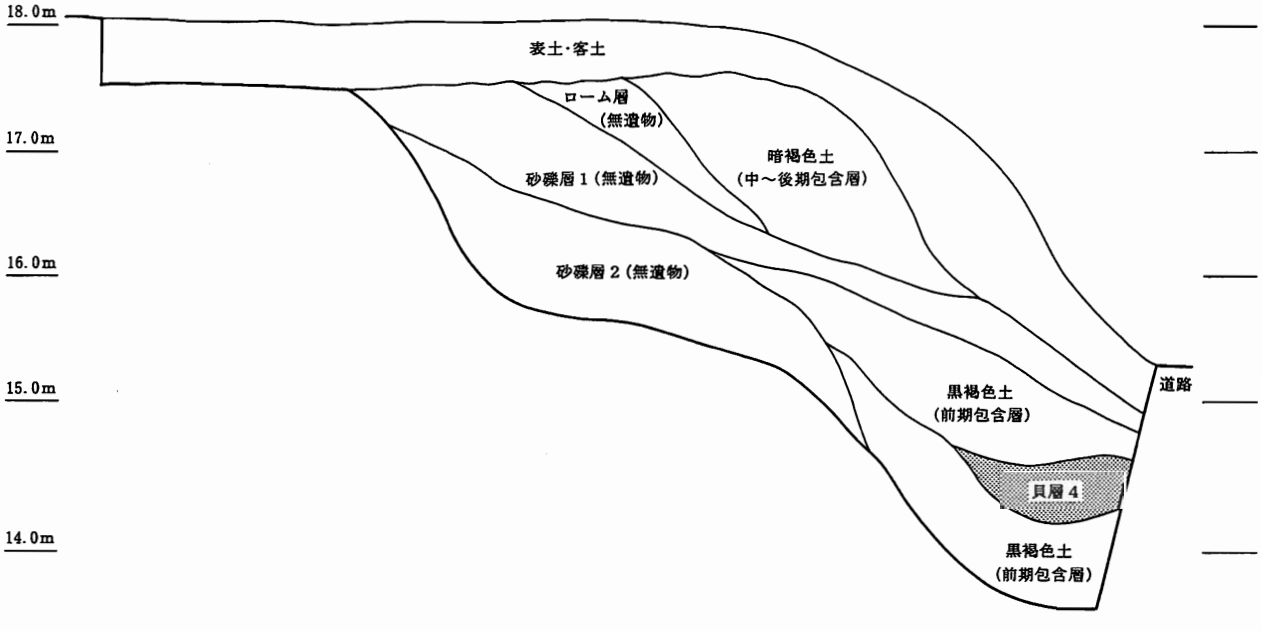


第２図　万田貝殻坂貝塚　平面分布図（１：750）

名称	東西	南北	層厚（最大）	時期
貝層１	1.2m	0.9m	0.15m	中～後期
貝層２	3.2m	0.8m	0.6m	前期
貝層３	4.2m	1.4m	0.7m	前期

名称	東西	南北	層厚（最大）	時期
貝層４	5.5m	1.6m	1.0m	前期
貝層５	1.7m	1.0m	0.7m	前期
貝層６	1.2m	0.6m	0.3m	前期

表１　貝層一覧表



第３図　貝層４付近土層堆積模式図（１：60）

写真１　貝層３・貝層４検出状態

写真２　遺跡近景

写真３　貝層３土層堆積状態

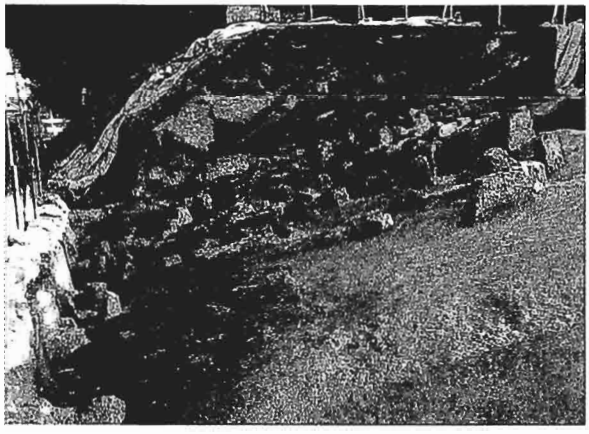


写真４　東側前期遺物出土状態

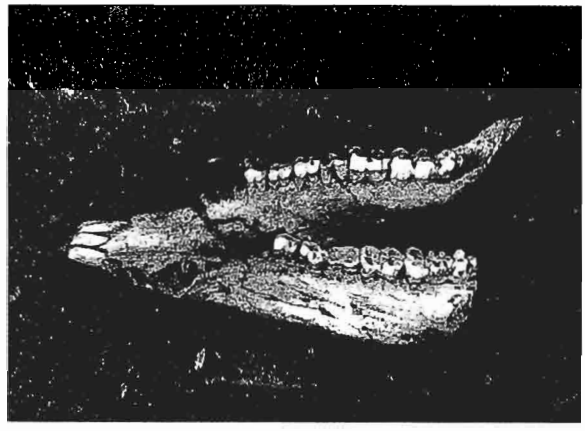


写真５　貝層３出土獣骨（イノシシ下顎骨）

小田原市　千代南原遺跡第ＸＸⅢ地点・第ＸＸⅣ地点

―前期古墳の周溝と古代寺院の基壇の調査―

渡辺　千尋

所 在 地　小田原市千代字南原550
調査機関　小田原市教育委員会
調査担当　渡辺千尋
調査原因　個人住宅新築工事に伴う事前調査
調査期間　第ＸＸⅢ地点:2005年10月７日～2005年11月25日
第ＸＸⅣ地点 2006年１月11日～2006年３月16日
調査面積　第ＸＸⅢ地点：66 ㎡
第ＸＸⅣ地点：64 ㎡

１．遺跡の立地

千代遺跡は、酒匂川左岸の低位台地上に立地する。この台地は、二つの小さな谷によって分断され、本遺跡は、中央の千代台地に位置している。

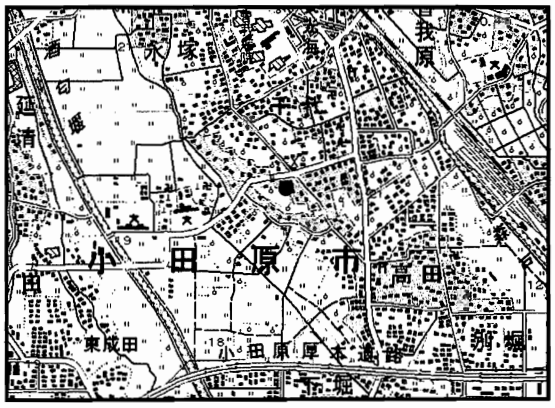
千代遺跡は、台地平坦面全域から斜面にかけて分布し、縄文～奈良・平安時代、中世の遺跡として知られている。小字ごとに遺跡名が細分され、本地点は千代台地南西側の千代南原遺跡に位置する（第１図）。千代南原遺跡の台地平坦面上には、弥生～奈良・平安時代の遺跡が濃密に分布していることが過去の調査から明らかとなっている。

本地点は、標高29mの千代台地南側の平坦面上に立地している。周辺は、民家と畑地が混在しているが、近年急速に宅地化が進んでいる。

２．調査に至る経緯と調査経過

個人住宅の新築工事に先立ち、小田原市教育委員会が主体となって事前の調査を実施した。

第ＸＸⅢ地点は、2005年10月７日より表土の除去を開始し、奈良・平安～弥生時代までの遺構を調査した。11月17日より古墳周溝の調査を開始し、11月25日にすべての調査を終了した。



第１図　調査位置図（1/25,000）

また、第ＸＸⅣ地点は、2006年１月11日に調査を開始し、表土直下で千代古代寺院（通称「千代廃寺」）関連遺構を検出した。寺院遺構の調査と併行し、奈良・平安～弥生時代の各時代の遺構を調査した。３月３日に寺院遺構に関する記者発表を行った。３月14日に調査区を拡張し、寺院遺構の範囲確認を行った後、３月16日に調査を終えた。

３．調査の概要

[千代南原遺跡第ＸＸⅢ地点]

本地点の調査では、前期古墳の周溝と考えられる大型の溝が検出されたことが特筆される。この溝は、千代南原遺跡第Ⅵ地点および第ＸⅨ地点において検出されたものと同一の溝で、前方後方墳の後方部南東側に位置すると推定される(第２図)。

周溝は、調査区の西側で検出され、東側の立ち上がりが確認された。調査区を南北にやや曲線を描きながら縦断し、確認された規模は、幅 3.5m超、長さ6.2m超、深さ1.8mである（第４図)。立ち上がりは、ほぼ垂直で、底面の一番広いとこ

ろでは、3.2m超の幅が確認された。底面は、数10㎝の凹凸をもつ（写真１）。

遺物は、覆土下層を中心に古墳時代前期、３世紀後半に比定される土器が、まとまって出土した（第３図）。壺、台付甕、高坏、小型高坏、小型器台など器種はバラエティーに富む。また、胴部穿孔の壺が１点出土している。胴部穿孔の土器は、住居跡からの出土事例が指摘されているため、その評価は慎重でなければならないが、方形周溝墓からの出土も認められており、本地点の溝が、古墳の周溝である可能性を示唆している。

覆土中層は、瓦など古代の遺物を含んでいることから、古墳は造営から400年あまりはその姿をとどめていたものの、近接する千代古代寺院の造成期の整地によって、周溝が埋め立てられた可能性が高い。また、それと同時に墳丘も削平され、消滅しているものと考えられる。

[千代南原遺跡第ＸＸⅣ地点]

本地点の調査では、千代古代寺院跡の基壇が検出された。千代古代寺院は、８世紀初めに創建され、８世紀末から９世紀前半に修復された後、10世紀前半まで存続したと考えられている。千代では、古瓦が出土することからその存在が古くから注目され、1958年に最初の発掘調査が行われているが、建物跡の検出は今回の調査が初めてである。

基壇は、調査区の西側で検出され、拡張した部分も含め、南北13m以上、東西６ｍ以上の規模であることが確認された（第５・７図）。その後、2006年７月に西側隣接区画において基壇の範囲確認を目的に行った千代南原遺跡第ＸＸＶ地点の調査で、さらに基壇の範囲は西側へ広がり、東西17m以上の規模であることが、新たに明らかとなっている。

本調査で検出された基壇では、基礎となる地面を一度掘り下げ、その内部を版築によって土を薄く層状につき固めながら埋め戻す地盤改良が行われている。この基礎地業は、掘り込み地業と呼ばれるもので、基壇の形成と一連の工程で行われたものと考えられる。本地点の掘り込み地業では、主に黒色スコリア層と暗赤褐色の鉄分を多く含む土層を互層につき固めており、また、強度を高めるため、こぶし大から人頭大の川原石や瓦を埋め込みながら作業が行われている（写真２）。今回検出された基壇は、掘りこみ地業の底面から80㎝の高さを残存しているが、上面は、攪乱を受けている。礎石の痕跡は、明らかにならなかった。

出土した土器は、８世紀前半にまとまりをもつが、出土した平瓦には時期差のある格子叩きと縄目叩きの双方があり、今後の検討が必要である（第６図）。また、大型の掘立柱建物の柱穴が１基検出されており、基壇上面から掘り込んで形成されていることも注意される。

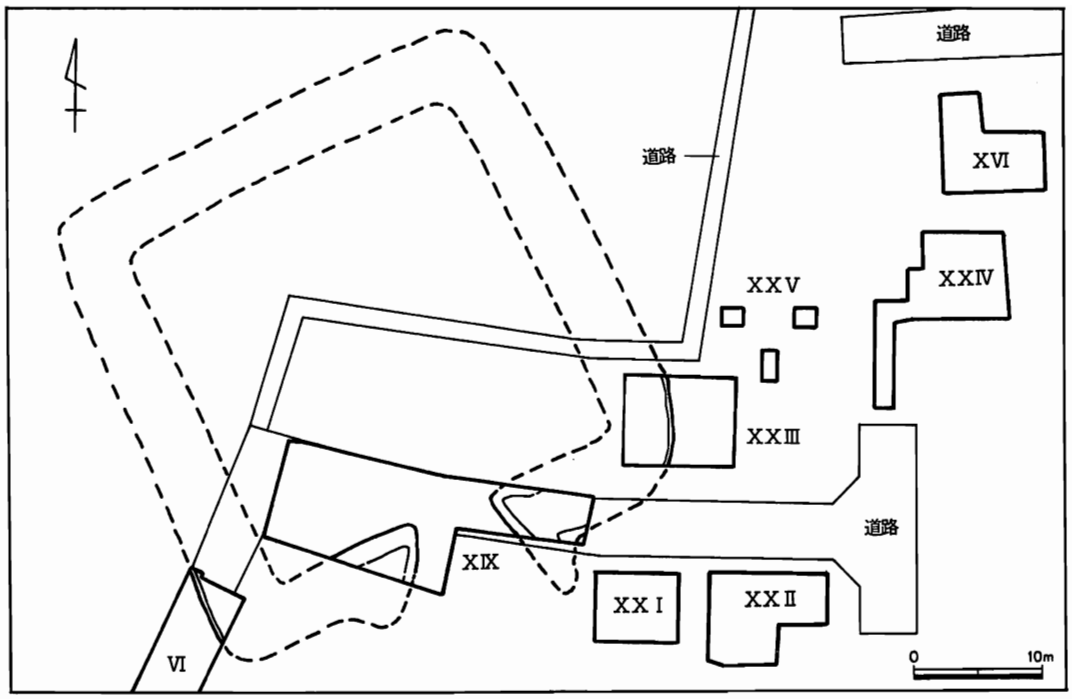
この基壇は、その規模や構造から主要建物跡（金堂・塔・講堂）の基壇であると考えられるが、現段階では、いずれの建物であるかの確定はできず、今後の調査成果に期待される。

４．まとめ

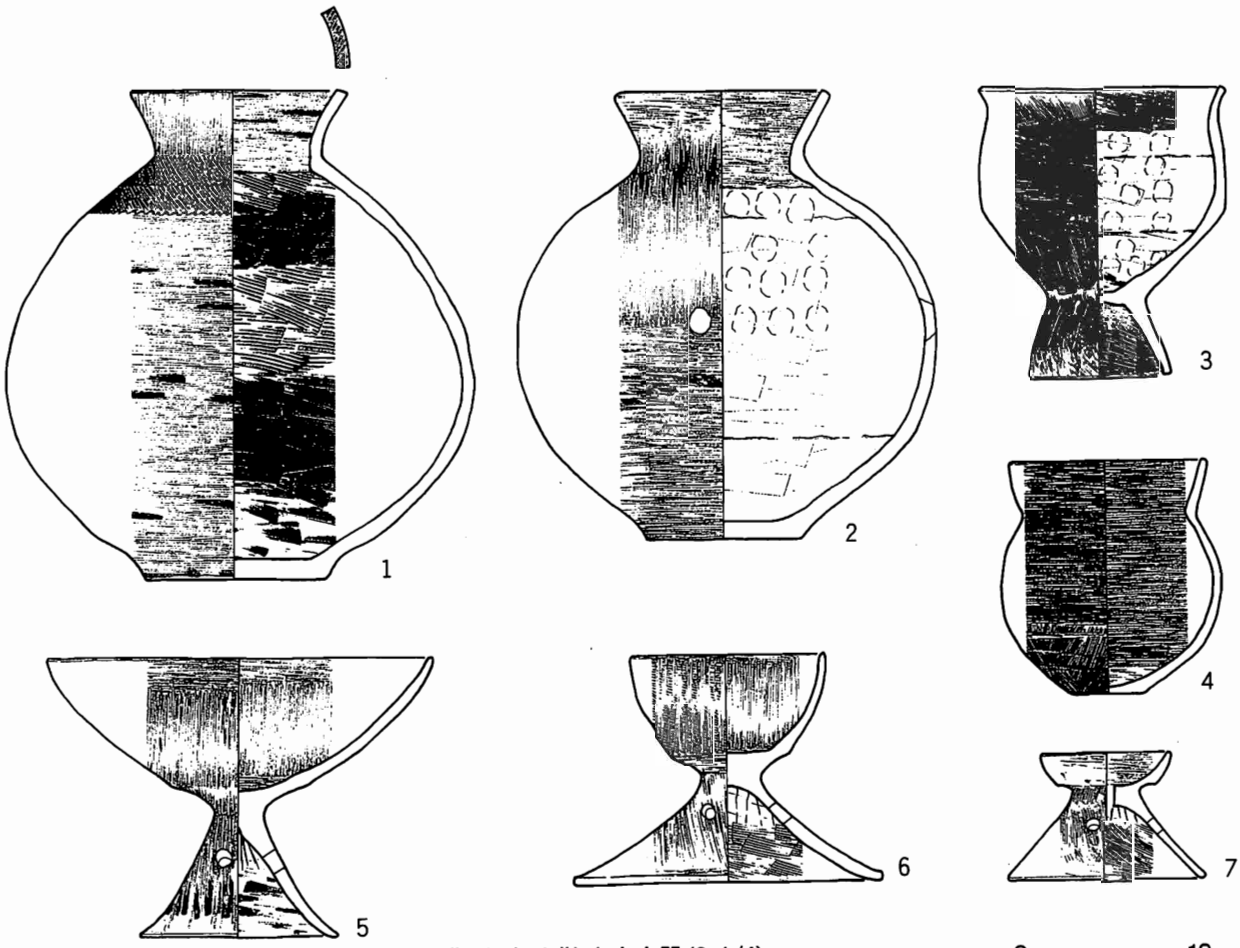
千代南原遺跡第ＸＸⅢ地点において、前方後方墳の周溝が検出され、足柄平野における前期古墳の存在が明らかになったことは、神奈川県域にとどまらず、東日本の古墳の出現を考える上で、重要な問題である。相模平野における古墳群とともにその関係を整理し、古墳文化の受容の過程を検討していかなければならない。

千代南原遺跡第ＸＸⅣ地点では、初めて千代古代寺院の基壇が検出され、一部ではあるが、具体的な姿が明らかになった。周辺地点での調査成果を含め、寺域や伽藍配置の再検討を行い、古代寺院の実態解明を進めていく必要がある。

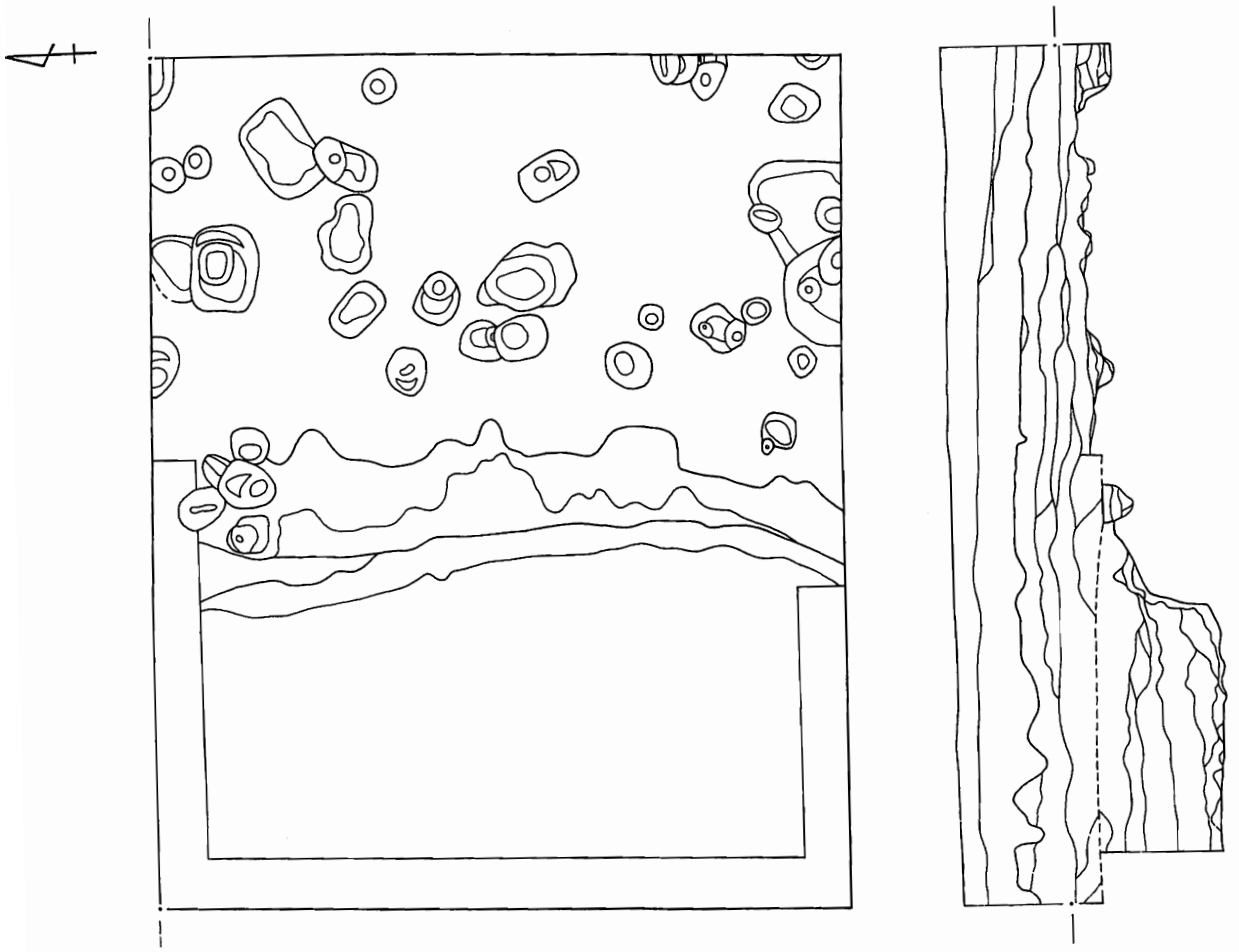
千代遺跡において、各時代における象徴的な構築物が連綿と形成されていることが明らかになりつつある。千代台地周辺の遺跡群の動向に注目し、歴史的位置付けを行っていく必要があろう。



第２図　第ＸＸⅢ地点周辺調査区と古墳周溝想定図(S=1/600)



第３図　第ＸＸⅢ地点１号溝(古墳周溝)出土土器(S=1/4)



第４図　第ＸＸⅢ地点遺構配置図・土層断面図(S=1/80)

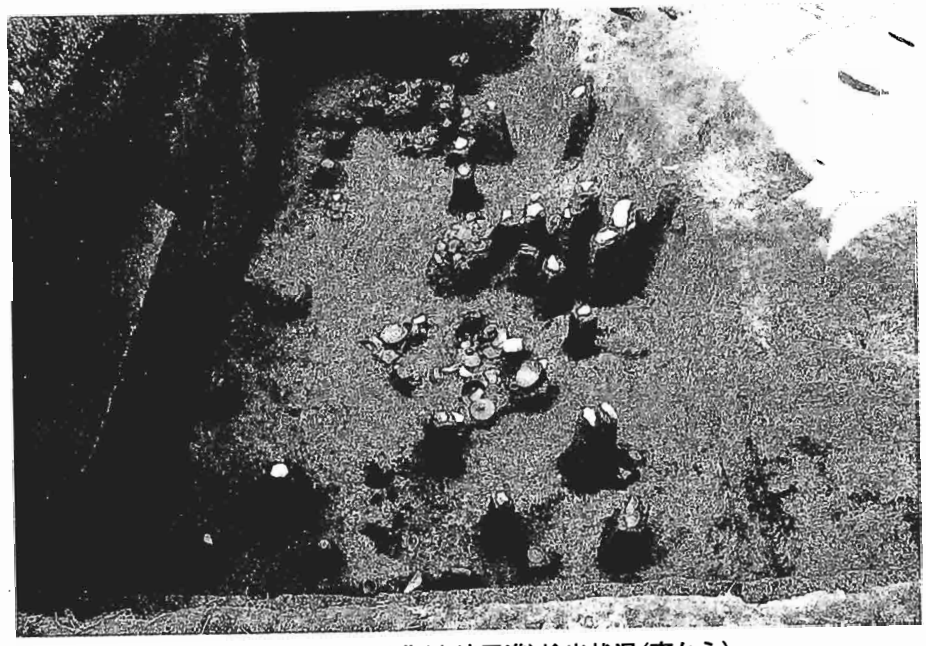
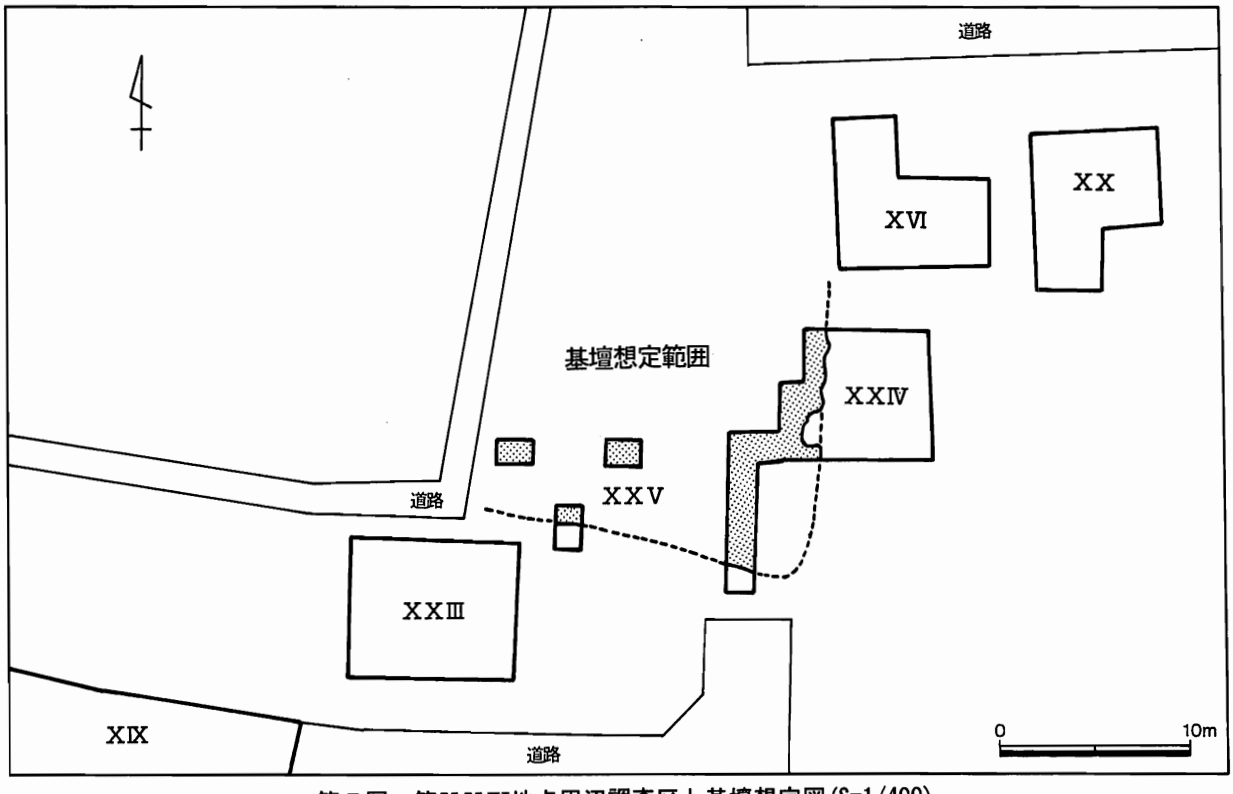
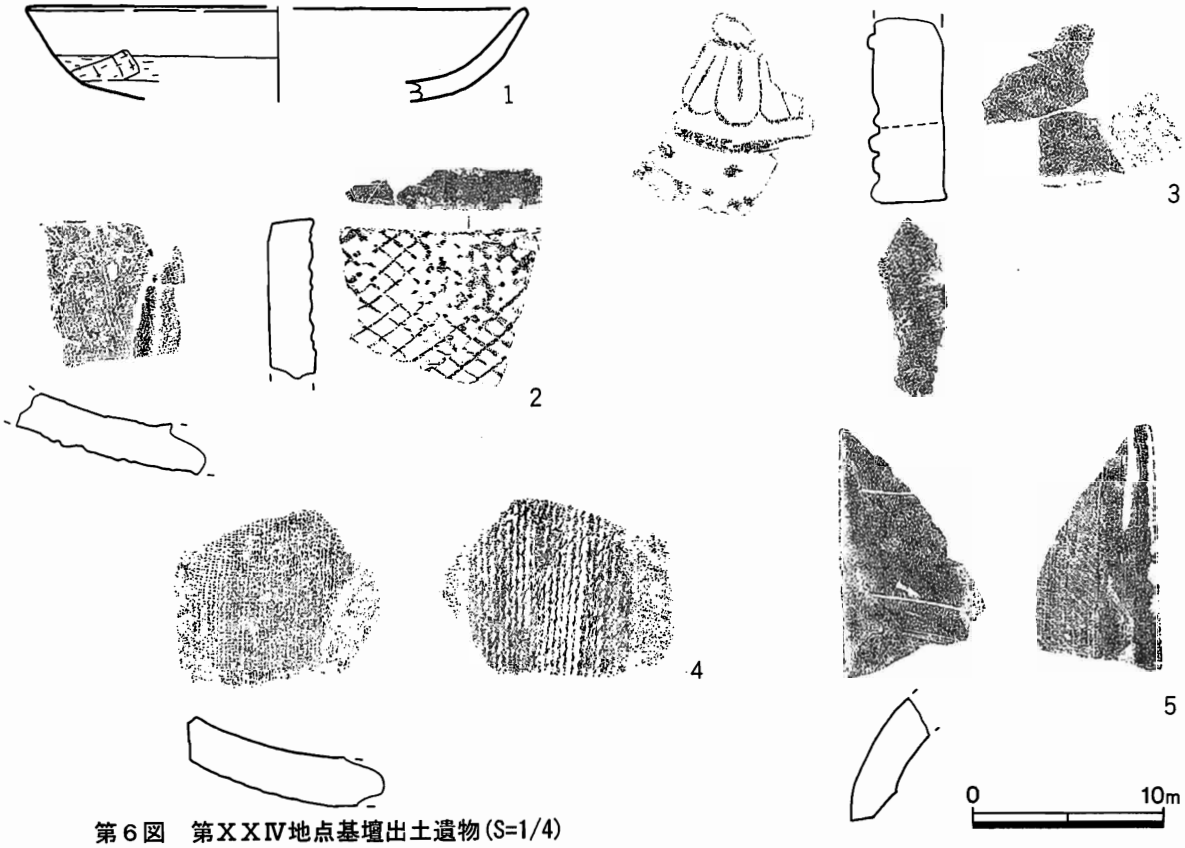


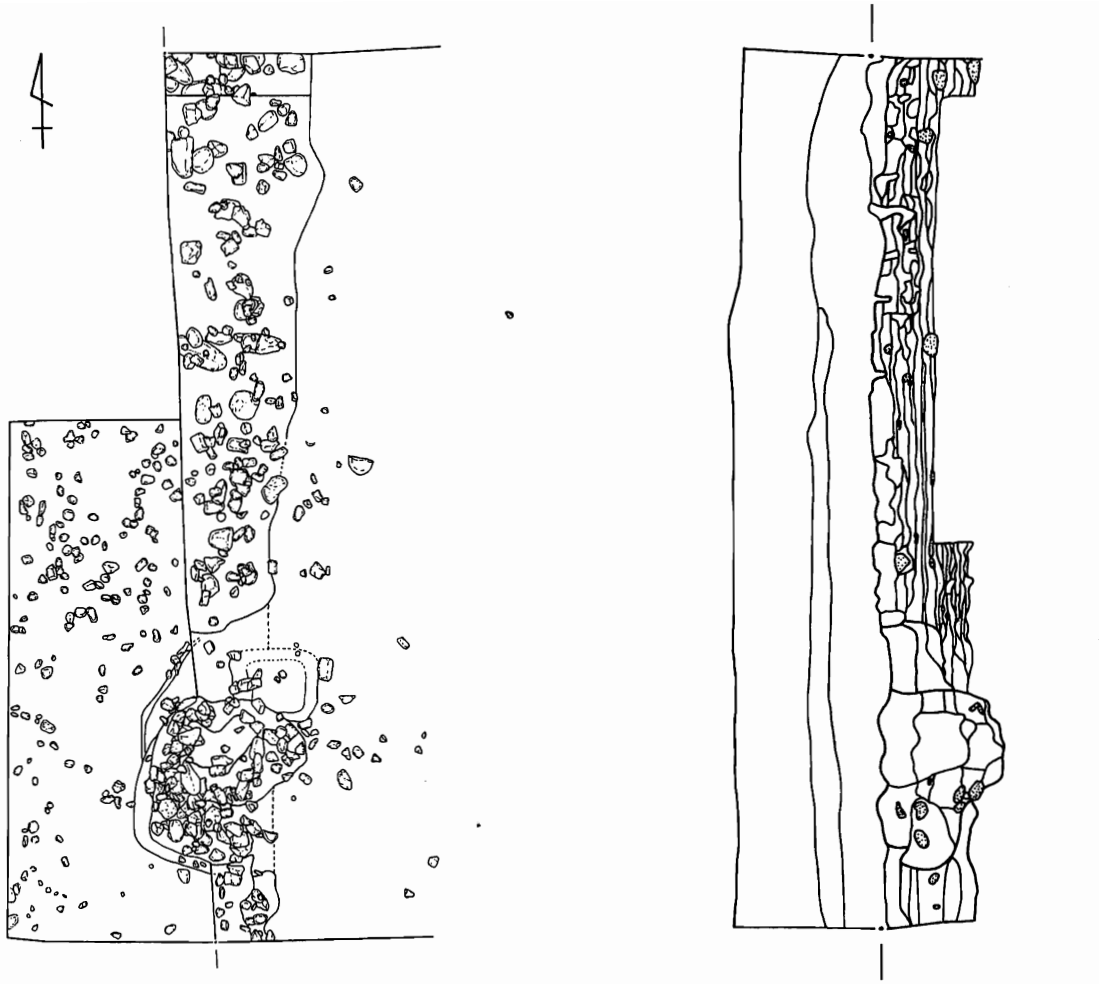
写真１　１号溝(古墳周溝)検出状況(南から)



第５図　第ＸＸⅣ地点周辺調査区と基壇想定図(S=1/400)



第６図　第ＸＸⅣ地点基壇出土遺物(S=1/4)



第７図　第ＸＸⅣ地点本調査区西側遺構配置図・土層断面図(S=1/60)

写真２　第ＸＸⅣ地点基壇検出状況(南東から)

鎌倉市　若宮大路周辺遺跡群

―鎌倉市小町一丁目２７６番１８・２２・３８地点―

宮田　眞

所 在 地　鎌倉市小町一丁目２７６番18他
調査機関　株式会社　博通
調査担当　宮田　眞
調査原因　集合住宅建設に伴う緊急調査
調査期間　2005年6月20日～8月12日
調査面積　780㎡

1.遺跡の立地

調査地はまさしく鎌倉市街地の中心部にあり、商業地域と住宅地が混在する境界部にあたる。JR横須賀線鎌倉駅を起点にすると「若宮大路」を挟んだ南南東約200mの距離に位置し、大路とは僅か25m と近接する。若宮大路は言わずと知れた「鶴岡八幡宮」の参詣道だが、同時に都市鎌倉の南北中軸線をなしている。若宮大路は寿永元年(1182)に源頼朝が妻政子の安産を祈念して頼朝自らが指揮をとり造営したと伝える。調査地の東方 100mの距離には、「小町大路」と鎌倉第1の河川「滑川」があり、両者は「夷堂橋」で交差する。また調査地の西側には調査地に沿って「扇川」が南流しており、調査地のおよそ50m南で上述の滑川と合流する。

調査地の北東隣には日蓮宗「妙厳山本覚寺」があり、地元住人からは「にっちょさま」と呼び親しまれている。本覚寺は開山一乗日出、永享8年（1436）の創建と伝うる。『吾妻鏡』には本覚寺境内地は「夷堂」の地と見え、夷堂は元天台宗の寺であったが日出が改宗して創建したという。二世「日朝」の書状に本覚寺大乗坊を関八州の僧禄と成すことが見え「東身延」と称している。「にっちょさま」の俗称はこの二世に由来する。

さらに北方の若宮大路沿いには、鎌倉市生涯学習センターがある。その北隣りには同じく日蓮宗「長慶山正覚院大巧寺」がある。大巧寺は安産祈願の寺として有名で「おうめさま」という別称を持つ。これは当山五世日棟が産女の幽魂を鎮めたところから興ったという伝えがある。

中世の調査地付近には、「善宝寺」という寺院があったとの伝えがある。善宝寺については宗旨や創建年をはじめ詳細についてはほとんど伝っていないが、神奈川県津久井郡串川の光明寺蔵古絵図には当地付近に善宝寺の地などと見える。絵図を見る限りでは善宝寺の位置は今の「教恩寺」の辺りと考えられる。

調査地のある「小町」、南に接する「大町」・「材木座」一帯は、当時幕府から商工業活動を許された地域で、大町には現在も「米町」・「魚町」の小字が見られる。材木座の町名も「和賀江島」に陸揚げされた建築材（木材）を専業に扱う組合組織があった名残であろう。

調査地周辺地域ではこれまで多くの地点で発掘調査が実施されている。その全てをここに記すのは到底不可能であり、今回は本調査と関わりがもたれる二地点をご紹介する。

まず北隣する本覚寺所有の駐車場敷地内で昭和57年頃に実施された調査では、町屋的特長を示す切り合い関係にある複数の方形竪穴建築址が検出され、その埋め土から「鍋の鋳型」が発見された。鋳型のほかにも鉱滓・炭化物・鞴の羽口なども多く出土し鋳造関係の遺跡ではないかと話題を呼んだ。鉱滓の成分分析の結果銅であることも判明し

た。

さらにその北方の昭和 53～54 年に実施された鎌倉市生涯学習センター用地の調査では、鎌倉期の都市遺構群と室町期の土壙墓群が発見された。そしてここでも本覚寺駐車場内と同様に、鎌倉期の遺構覆土から「鋳型」が出土している。(鎌倉での鋳型出土の初例)

2. 調査に至る経緯と調査経過

平成 16 年に上記所在地において集合住宅建設計画が発生し、翌平成 17 年 4 月 19 日に鎌倉市教育委員会による試掘調査（トレンチ 2 箇所・合計約 8 ㎡）が実施された。試掘の結果、当該地地下には良好な中世遺跡の遺存が確認され、同年 6 月 20 日～8 月 12 日にかけて、パナホーム株式会社から委託を受けた株式会社博通が本調査に当たった。

3. 調査の概要

調査地付近は近世以降にかなりの削平を受けたらしく、現地表ぎりぎりの高さで中世遺物の出土があり、遺構検出面からは時期を異にする遺構が同時に検出される現象が生じた。

また調査地は 13 世紀の早い段階から、調査区中央付近を南北に貫く溝 3 と柱穴列（溝が先行）によって東西に大きく区画されており、その東西両区画からは遺構や遺物が密集して検出された。

検出遺構は方形竪穴建築址 12 棟・井戸 16 基・溝 4 条・落ち込み（池か？）1 箇所・柱穴等などが主に上げられる。

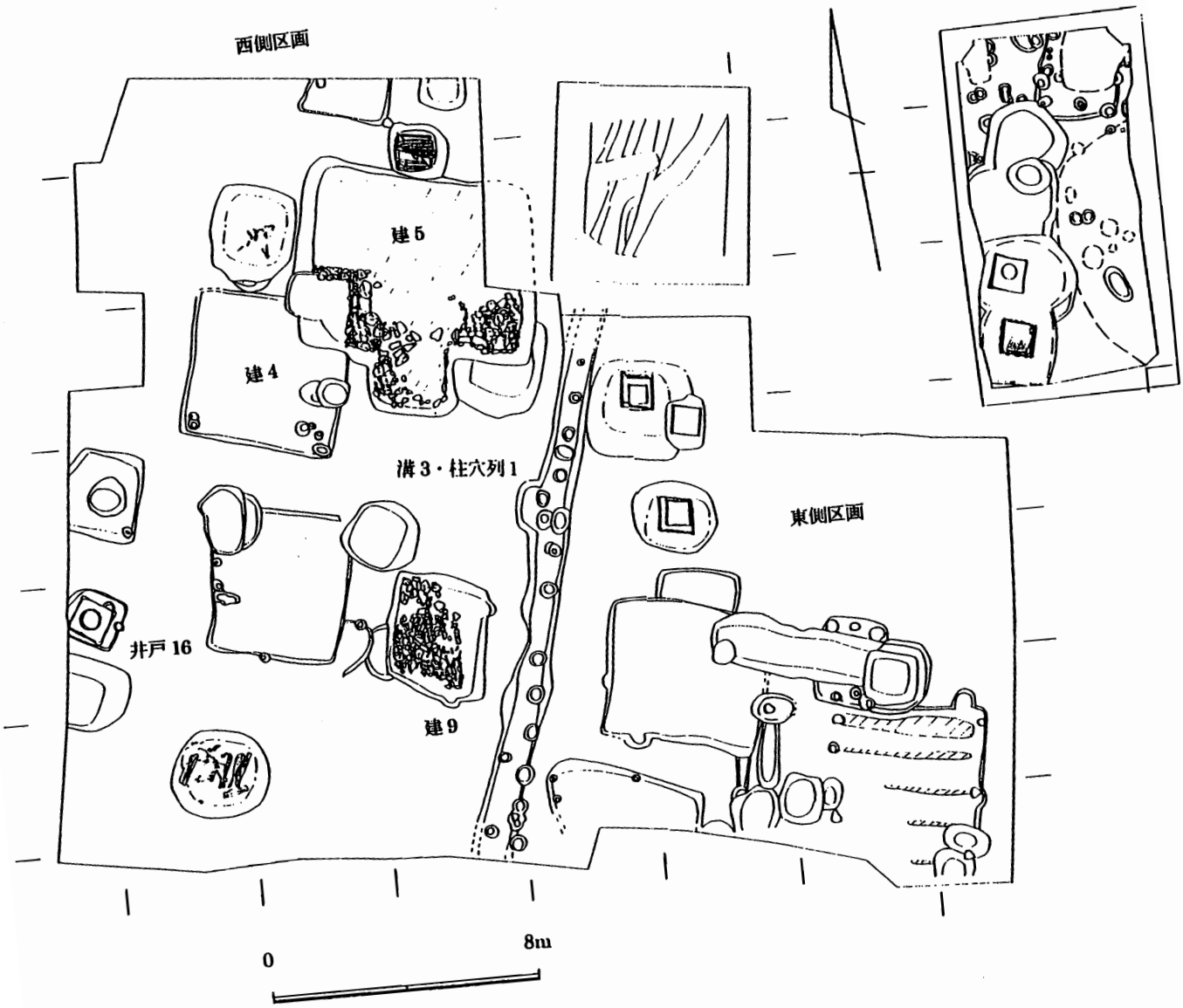
特に西側区画からは、土丹塊を床や壁に建材として使ったこれまで例を見ない大型方形竪穴建築址が検出された。同区画にはこの建物の他にも、床面に土丹塊を敷き詰めた方形竪穴建築址が 2 棟見つかっている。

また（西側区画の）井戸 16 からは数種類の鋳型（銅製品か?）がまとまって出土しており、上記の特殊方形竪穴建築址の存在とも考え合わせると、この西側区画には東側区画とはまったく異なった場としての特異性があるように強く感じる。

4. まとめ

西側区画で検出された上記方形竪穴建築址は、覆度出土遺物から少なくとも 13 世紀末頃までには廃棄されたことが確実である。この建物の廃絶時期から後の鎌倉時代末葉（14 世紀初頭頃）には、鎌倉石切り石を使った大型で重厚な方形竪穴建築址が、由比ガ浜付近の前浜地域を中心に市内各所で検出されており、その頃貨幣流通経済の発展によって現れだす有徳人層の倉庫等ではないかと言われている。今回見つかった土丹使用の方形竪穴建築址は、壁構造の近似性から切り石使用の方形竪穴建築址へと系譜的に繋がっていくのではないかと期待がもたれる。

また鋳造関係遺物のまとまった出土に関しては、本調査地のほかに過去の近隣の調査から、北側に隣接する本覚寺境内や鎌倉市生涯学習センター用地においても、鋳型をはじめ鋳造関係遺物が多数出土していることなどから、必ずやこの付近に鋳造製品の生産工房があったと確信している。



若宮大路周辺遺跡遺構配置図

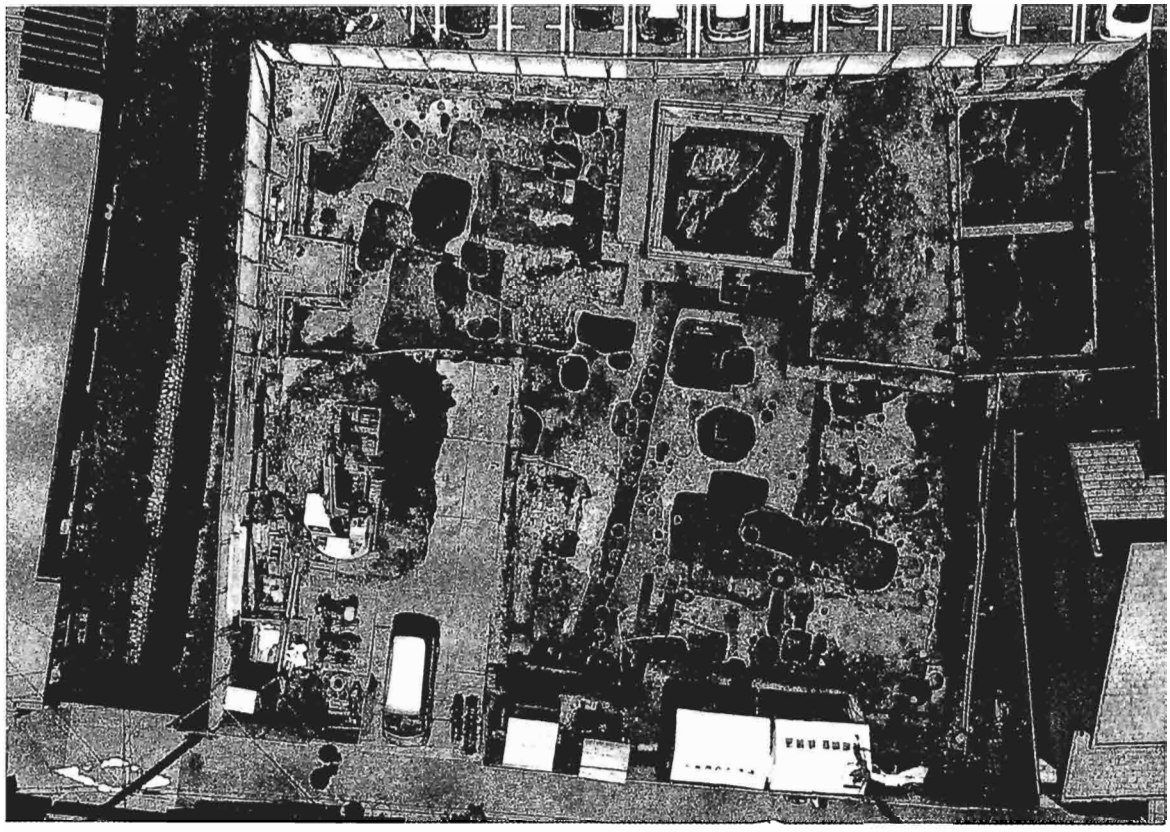


写真１　調査区全景（上方が北）

写真２　方形竪穴建築址５　南東隅部分土丹塊による床と壁

三浦市　がんだ畑（ばたけ）遺跡

―旧石器時代の土坑と縄文時代後期集落の調査―

山田（やまだ）　仁和（よしかず）

所 在 地　三浦市初声町三戸字蟹田1678他
調査機関　三戸地区埋蔵文化財発掘調査団
（団長　大坪　宣雄）
調査担当　長澤邦夫
調査原因　農地基盤造成工事
調査期間　2005年4月4日～10月31日
調査面積　20,900㎡

1．遺跡の立地

本遺跡は三浦半島の南西部に位置し、西側には相模湾を臨む。標高は37m～52mを測り、北東から南西にかけて緩く傾斜する。遺跡の位置する台地は南北側が幅の狭い開析谷で画されており、現況では畑地として利用されている。周辺の遺跡としては、本遺跡を含む今回の工事地域内に釜田遺跡、上の原遺跡、不入斗遺跡が所在し、またこれら遺跡群の東側に近接して、弥生時代中期から後期の大規模集落である赤坂遺跡がある。西側には縄文時代早期の遺跡として著名な三戸遺跡が所在する。南側には小網代湾を挟んで縄文時代中期末の敷石住居の検出された油壷遺跡、縄文時代前期、諸磯式土器の標識遺跡である諸磯遺跡がある。北方約3.0kmに位置する打木原遺跡ではAT降灰以前の土坑が検出された。

2．調査に至る経緯と調査経過

本遺跡は、昭和62年に三戸小網代地区遺跡調査団（団長　岡本勇）によって遺跡詳細分布調査が実施され、縄文時代後期及び弥生時代中期の住居跡と遺物が発見された。また、平成10・11年にも

第1図　遺跡位置図

三戸・小網代地区開発計画地内遺跡発掘調査団（団長　戸田哲也）により試掘調査が行われ、縄文時代、古墳時代の遺構・遺物が検出されている。今回の調査は「県営ほ場整備事業」に付帯する農地基盤造成工事に伴うもので、過去の調査結果を踏まえて調査範囲を設定し、実施された。

本遺跡では深耕による影響が大きく、調査範囲内の多くの地点でローム層上面以上の自然堆積層が失われている。調査区域は大きくA～D区、TP31拡張区に分けた。A区西側、B区の一部、D区北西～南部の台地縁辺部にかけては暗褐色土の堆積が認められ縄文時代の遺物が検出された。

3．調査の概要

以下、各区毎に発掘成果を概観する。

（A区）

調査地点のうちで最も東側に位置し、東側から

西側にかけて緩く傾斜する。調査面積は約 2,800 ㎡である。大半の範囲で耕作により縄文時代以降の自然堆積層は削平されているが、調査区の北側にのびる開析谷の谷頭に面した調査区北西部において暗褐色土が堆積しており、縄文時代早期の遺物がわずかに検出された。

旧石器時代のテストピットからは剥片・礫が少量検出された。１箇所のテストピットでは調査区を拡張して調査を行い、数点遺物の集中が認められた。

縄文時代の遺構としては、陥穴２基、炉穴４基が検出された。出土遺物が少なく遺構の所属時期の決定は困難だが、炉穴からは縄文時代早期後半の条痕文系土器がわずかに出土しており該期に属するものと考えられる。また、詳細な時期は不明だが溝状遺構が２条検出された。２号溝状遺構を切るかたちで中世陶器の検出された竪穴状遺構が１基構築されている。

（Ｂ区）

遺跡範囲の中では北東部、台地北側縁辺部から平坦面にかけて位置する。調査面積は約 8,700 ㎡である。北側斜面部、南西部に縄文時代の遺物包含層が確認されたほかは、ローム層上面まで削平されている。

旧石器時代のテストピットからは剥片・礫が検出されたが、とくに遺物の集中する範囲は検出されなかった。また、これら調査終了後、相模野台地 L5 層上面まで掘り下げ遺構の検出を試みた結果、４基の土坑が確認された。これら土坑は平面形が径 0.80～0.90mの円形を呈し、深さは検出面から 0.60～0.80m を測る。断面形は上部がやや漏斗状に開く。規模、形態とも類似する。また、覆土上層には相模野台地Ｂ4 層に似た土層が堆積する。

縄文時代の遺構としては、調査区の中央から南西部にかけて住居跡 18 軒、土坑１基が検出された。このうち、前期初頭花積下層式期が２軒、後期初頭から前葉が 15 軒、後期中葉が１軒である。後期の住居跡のうち３軒が敷石住居跡である。後期中葉の住居跡１軒を除くと、全般に遺構の遺存状態は良くなく、壁・床面とも検出されず柱穴の配置から住居跡を推定したものが多い。このほか、炉穴１基、集石１基が検出された。

調査区南側において弥生時代中期の住居跡１軒、古墳時代前期の住居跡１軒が検出された。ともに、調査区外まで広がっており全容は捉えられなかった。また、近世以降に構築されたと推定される溝状遺構２条、土坑３基が検出された。

（Ｃ区）

遺跡範囲の中では中央やや南よりに位置する。調査面積は約 1,600 ㎡である。他の調査区同様に削平が深くまでおよび縄文時代以降の自然堆積層は認められない。

旧石器時代のテストピットからは剥片・礫が検出されたが、とくに遺物の集中する範囲は検出されなかった。縄文時代およびそれ以降の遺構は検出されなかった。

（Ｄ区）

遺跡範囲の中では南西部に位置し、調査区の東側から南側には小網代湾岸沿いの低地まで続く谷が伸びている。調査面積は約 4,200 ㎡である。本調査区東側の台地縁辺部付近では縄文時代後期初頭から前葉の遺物包含層が認められ、とくに北西部付近ではまとまった量の遺物の出土がみられた。旧石器時代のテストピットからは剥片・礫がわずかに検出されたが、とくに遺物の集中する範囲は検出されなかった。

縄文時代の遺構としては、前述の遺物包含層を掘り下げ後、ローム層上面で約 50 基のピットが検出された。平面的な配置関係から住居跡を構成すると考えられるものが存在するが、多くのピットについては対応関係が判然とせず建物跡をなすも

のか現時点では不明である。このほか、本調査区東側で後期前葉の住居跡が２軒検出された。１軒は炉と柱穴が検出されたのみで床、壁は削平されていた。他の１軒は柱穴の配置から２回の住居の構築がうかがわれる。

このほか古墳時代前期の住居跡２軒、近世以降の溝状遺構４条、土坑２基が検出された。

（TP31 拡張区）

前記の A～D 区以外の範囲において、主に旧石器時代の遺構・遺物の検出を目的として、各耕地の一筆毎に２ｍ×２ｍのグリッドを基本として調査を行なった。これら調査範囲は、すでに土地所有者によって天地返しが行われていることが事前の聞き取りから判明しており、今回の調査でも削平はローム層までおよんでいることが確認された。旧石器時代のテストピットのうち、遺物の集中のみられた TP31 については調査区の拡張を行い、石器ブロック２箇所および土坑３基を検出した。検出された土坑のうち１基は、石器ブロックの広がりと重複しており、覆土上層には遺物を多く含んだ相模野 B4 層に類似した土層が堆積していた。

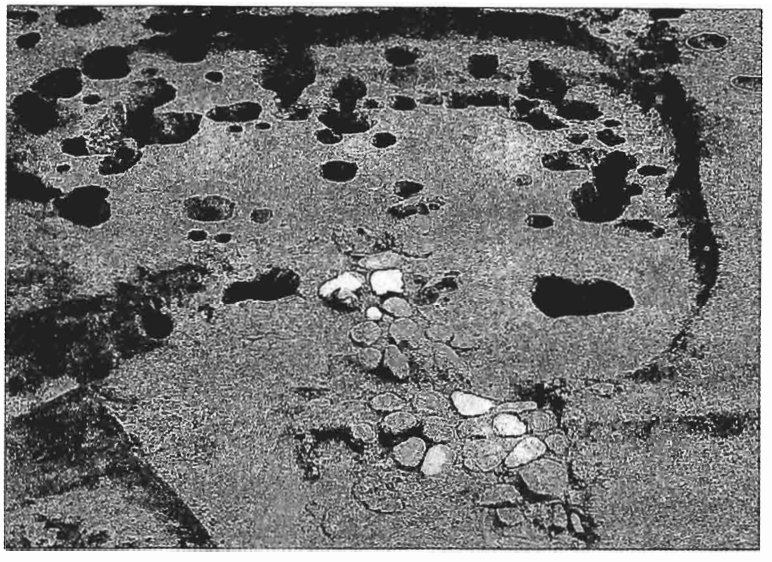


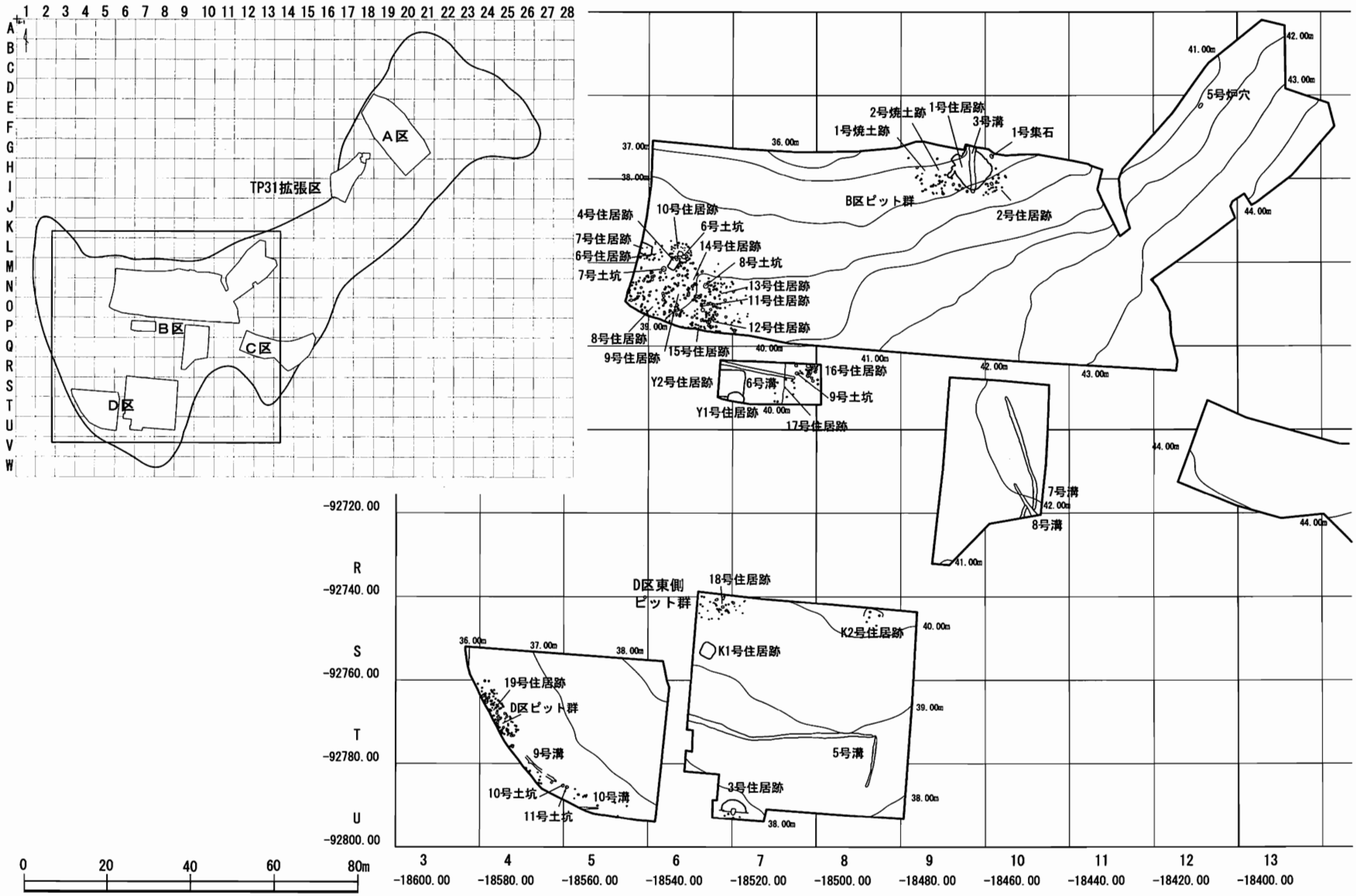
写真１　１号住居跡

４．まとめ

今回の調査で検出された遺構、遺物は調査面積に比して多くはないが、いくつかの重要な成果を得ることができた。旧石器時代に関しては、本地域では確認されている遺跡数自体が少ないが、その中にあって２箇所の石器ブロックや土坑が検出されたことは注目される。土坑の構築時期は現時点では明瞭ではないが、ＡＴ降灰以前の遺構の可能性が推定される。その性格については、土坑の分布、立地状況、石器ブロックの分布状況との関連や覆土の形成過程、打木原遺跡（横須賀市長井）で検出された陥穴とされている土坑との比較検討等から今後、明らかにしていきたい。

縄文時代後期には、過去の詳細分布調査の成果から本遺跡は「主体的な居住跡」と捉えられていた。今回、検出された住居跡群は、これを裏付けるものと考えられる。また、後期初頭から中葉期の敷石住居跡が３軒検出されたが、三浦半島では江戸坂貝塚、油壺遺跡に次いで３例目であるとともに、住居形態の経時的な変化を示す資料といえる。また、前期初頭の花積下層式期の住居跡が検出されたが、当地域では、江戸坂貝塚、吉井貝塚等、数遺跡で遺物が出土しているほか、いまだ実態が明らかでない点も多く、出土遺物とともに早期末から前期初頭にかけての様相の変化を検討するうえで、貴重な資料になるものと考えられる。

弥生時代の調査成果は中期の住居跡が１軒検出されたのみではあるが、前述のように本遺跡の北方には、方形周溝墓の検出された釜田遺跡や中期から後期にかけての大規模遺跡である赤坂遺跡があり、これらの遺跡との関連が考えられよう。


A区
B区
C区
D区
TP31拡張区
1号焼土跡
2号焼土跡
1号住居跡
3号溝
1号集石
5号炉穴
B区ピット群
2号住居跡
4号住居跡
10号住居跡
6号土坑
7号住居跡
14号住居跡
6号住居跡
8号土坑
7号土坑
13号住居跡
11号住居跡
12号住居跡
8号住居跡
9号住居跡
15号住居跡
16号住居跡
Y2号住居跡
6号溝
9号土坑
Y1号住居跡
17号住居跡
7号溝
8号溝
D区東側
ピット群
18号住居跡
K2号住居跡
K1号住居跡
19号住居跡
D区ピット群
9号溝
5号溝
10号土坑
10号溝
11号土坑
3号住居跡
R
S
T
U
-92720.00
-92740.00
-92760.00
-92780.00
-92800.00
-18600.00
-18580.00
-18560.00
-18540.00
-18520.00
-18500.00
-18480.00
-18460.00
-18440.00
-18420.00
-18400.00
0
20
40
60
80m

第２図　遺構配置図

横浜市　下組東貝塚（しもぐみひがしかいづか）

―縄文時代前期の貝塚―

戸田（とだ）　哲也（てつや）・迫（さこ）　和幸（かずゆき）

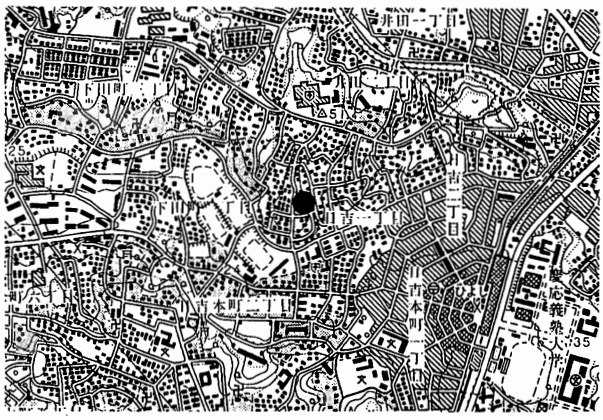
所 在 地　横浜市港北区日吉１丁目５－１外
調査機関　玉川文化財研究所
調査担当　戸田哲也・迫　和幸・中山　豊
調査原因　宅地造成工事に伴う事前調査
調査期間　2005年5月26日～2005年6月27日
調査面積　60㎡

１．遺跡の立地

下組東貝塚は横浜市北部に所在する。地形的には鶴見川の支流である早淵川と矢上川に挟まれた東西に延びる台地にある。当該地一帯は小河川の浸蝕谷が発達し、東から西に向かって小河川が入り込み、さらに南から深い谷戸が形成される。下組東貝塚は、この谷戸に挟まれた南側に張り出す舌状台地の標高 33mを測る縁辺から東側斜面部に位置する。現在の標高は斜面下端部の調査区東側で 27m、斜面上端部の調査区西側で30mを測り、南方沖積地との比高差は15mである。

下組貝塚は、縄文時代前期初頭花積下層式土器を出土する遺跡として知られ（酒詰　1938）、台地の縁辺に沿って下組東貝塚、下組西貝塚、下組南貝塚からなる貝塚である。下組東貝塚の調査は、戦中、戦後に行われ、昭和17年、大山柏氏を中心とし慶應義塾大学史学科が東貝塚の斜面北側において調査（大給　1943）し、昭和24年から翌昭和25年に慶應義塾高等学校考古学会が東貝塚の斜面南側の調査（慶應義塾高校学校考古学会　1950・1951）を行った。今回の調査地点はこの慶應義塾高等学校考古学会の調査区下端にあたる。

周辺に所在する同時期貝塚としては、北西約２㎞に野川遺跡、新作貝塚、西約3.5㎞に北川貝塚、南東約3.5㎞に梶山貝塚、南約５㎞に菊名貝塚が位置している。



第１図　調査位置図（1/25,000）

２．調査に至る経緯と経過

今回の調査は宅地造成工事に伴って実施されたものである。造成区域内は、下組東貝塚に該当するため、2005年１月24日、横浜市教育委員会の試掘調査が行われた。その結果、区域内の南側で貝塚が遺存することが明らかとなり、2005年５月26日から2005年６月27日の期間で玉川文化財研究所が事前調査を行った。

３．調査の概要

今回の調査によって縄文時代前期初頭花積下層式期の貝塚が発見された。出土遺物は土器が整理用テン箱16箱分、石器176点、骨角器12点、貝製品８点、そしてハマグリを主体とする貝類・魚類・爬虫類・鳥類・哺乳類などの動物遺存体を検出し、回収した貝層サンプルは約 250 袋を数える。以下、調査区全体図及び土層断面図（第２図）をもとに貝塚の概要を述べる。

まず、貝層（Ⅲ層）の広がりを見ると、西側斜面上方の台地縁辺部から東側斜面下方の谷側に向かった東西 13.0m、南北 5.3mの範囲に広がる。谷側にあたる調査区東端部からは、等高線に沿った状態で貝層下端

の限界部が確認され、南北側区域は広く撹乱が及んでいることが明らかとなった。そして調査区西側の斜面上方は、貝層が上方に向かって厚く堆積する状態が観察され、安全上を考慮し、可能な限り拡張を繰り返しながら調査を行い、残されていた貝層の西限を把握した。その結果、貝塚は調査区全体図に示した範囲において残されていた。貝層の傾斜角は 17°を測り、厚さは西側斜面上方で最大約 1.1m、中央斜面で約 80cm を測り、斜面下方に向かって薄くなり限界部に達する。

貝層で確認した層序は、Ⅰ～Ⅴ層（第２図２区壁面）に大別した。Ⅰ層は現表土及び撹乱層。Ⅱ層は純貝層上に堆積する黒褐色土であり、花積下層式土器が含まれる。Ⅲ層はハマグリを主体とする純貝層であり、純貝層の各所で厚さ数ミリ程度のマテガイの薄い層が観察された。この純貝層中には黒色土を混入する間層が認められ、破砕貝を主体とし、炭化物が集中する箇所も見られた。純貝層からは多種の動物遺存体を含め大型の土器破片、釣針や装身具類を中心とする骨角器、貝製品が出土した。Ⅳ層は混貝土層であり、ハマグリの破砕貝を主体とし、炭化物が多く含まれる。この破砕貝は貝層最下部にあたるものと考えられるが、Ⅴ層に最上部食い込む状態も観察された。本土層からは多量の土器、石器、自然礫が検出されている。Ⅴ層は暗褐色土であり、最上部のみ遺物が検出された。

土器は前期初頭花積下層式土器群が整理テン箱 16 箱出土した。出土層位はⅡ層～Ⅳ層であり、特にⅣ層中の土器が最も出土量が多く、全体の７割ほどを占める。器形復元できる土器は完形土器を含め数十個体あり、すべて胎土に繊維を含む花積下層式に属するものである。また、同破片類も相当量出土し、本型式の標識的資料となる土器群といえよう。また、Ⅳ層からは口縁部と底部を欠く木島式の大破片が出土した。

石器は総点数 176 点が出土し、定形的石器は 147 点を数え、出土層位はⅣ層に集中する。石器は磨石 43 点で最も多く、全体の３割強であり、次いで礫器 27 点、敲石 24 点、凹石 20 点、スクレレイパー14 点、局部磨製石斧、石皿は各６点、石鏃、軽石は各２点、スタンプ状石器、砥石が各１点が出土している。

骨角器は釣針４点、髪飾り（ヘアピン）５点、ヤス状刺突具２点である。釣針は鹿角製の大型の釣針であり、最大長 7.69cm を測り、軸頭部に溝状の切り込みが加えられる。髪飾り（ヘアピン）は頭部がヘラ状に研磨され、線刻、穿孔されるものがある。

貝製品は貝刃がⅢ層から８点出土した。いずれもハマグリを素材とした完形品であり、貝殻の左殻を使用するものが多く、腹縁全体にわったって内面から押圧剥離によって付刃される。

動物遺存体は、貝類、魚類、爬虫類、鳥類、哺乳類が出土している。貝類は、湾央砂底に生息するハマグリが主体となり、アワビ類、スガイ、アカニシ、イボニシ、ツメタガイ、ツノガイ類、ハイガイ、アカガイ、サルボウ、マガキ、カガミガイ、マテガイなど多種にわたる。魚類は、メジロザメ科、エイ目、ウグイ、イワシ類、マアジ、ボラ、スズキ、クロダイ、マダイ他。爬虫類はヘビ類。鳥類はキジ。哺乳類はイヌ、アナグマ、タヌキ、イノシシ、二ホンジカが確認されている。

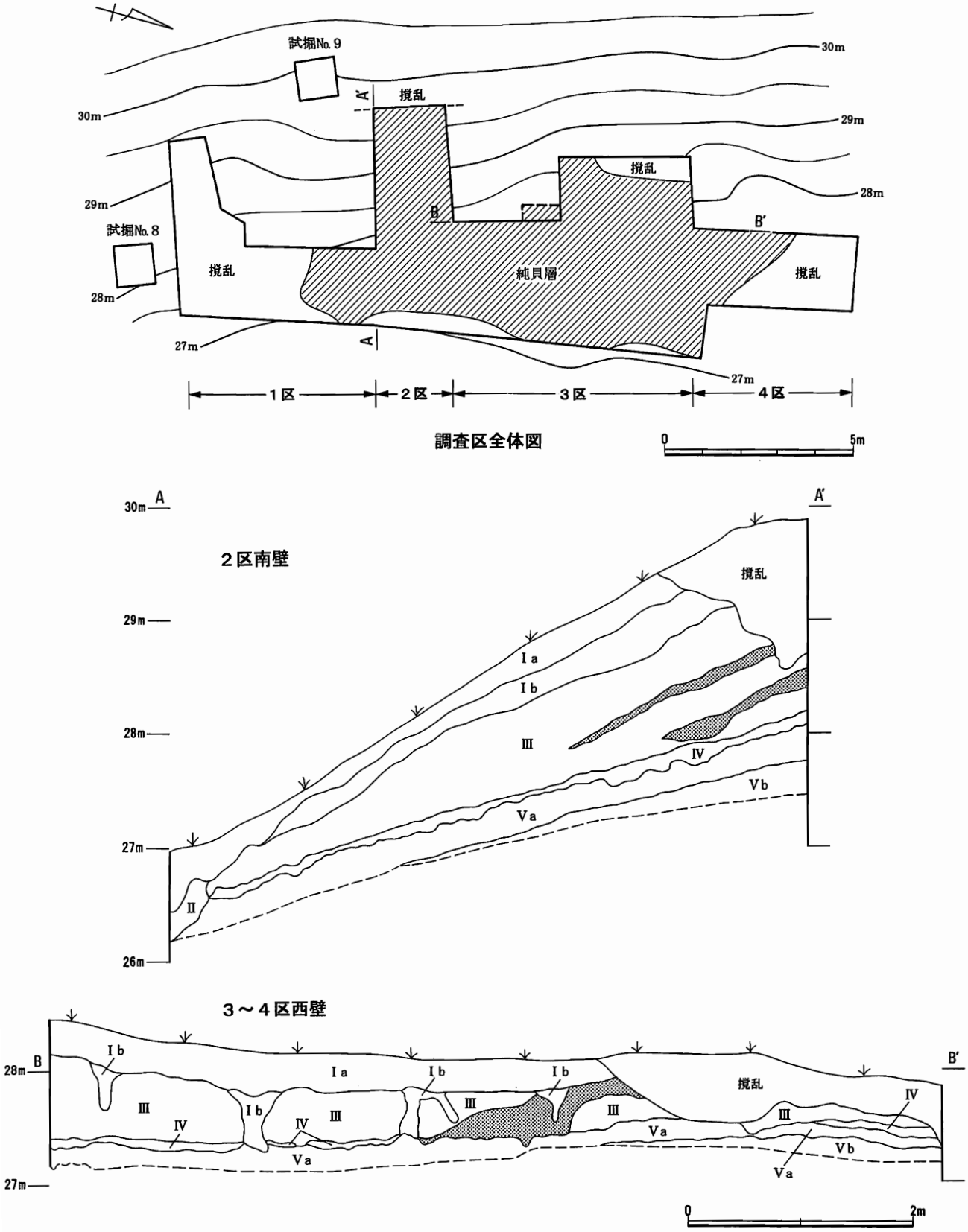
以上、今回の調査により下組東貝塚の正確な位置が捉えられ、さらに貝塚の遺存範囲が明らかとなった。先に行われた戦中・戦後の調査は斜面上方の西側部分、すなわち全体図に示した撹乱部分に相当するものであろう。今後、周辺遺跡との関わり、人工・自然遺物分析を行い、遺跡の解明をしていくつもりである。

文　献

酒詰仲男　1938「神奈川県下貝塚調査概報Ⅰ～Ⅲ」『人類学雑誌』53 巻１～３号　東京人類学会

大給　尹　1943「神奈川県下組貝塚に於ける自然遺物」『史前学雑誌』第 22 巻１号　史前学会

慶應義塾高等学校考古学会　1950・1951「神奈川県下組東貝塚発掘調査報告書」Archaeology6・10



第２図　調査区全体図（1:150）および土層断面図（1:50）

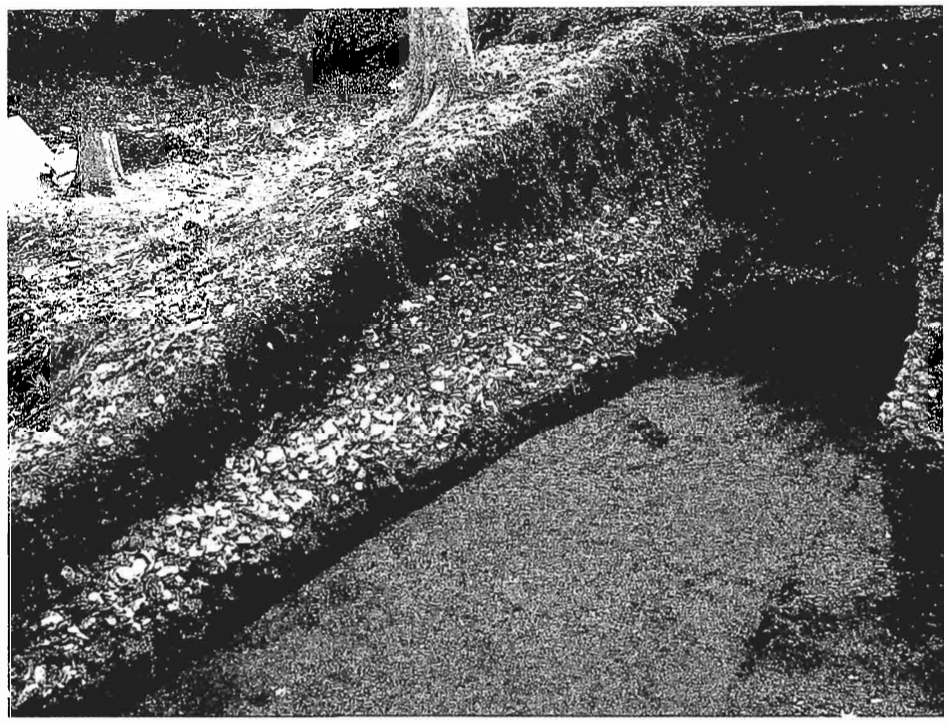


写真１　２区南壁貝層堆積状態（北東から）

写真２　２・３区貝塚検出状態（北東から）

写真３　３区Ⅳ層遺物出土状態（南から）

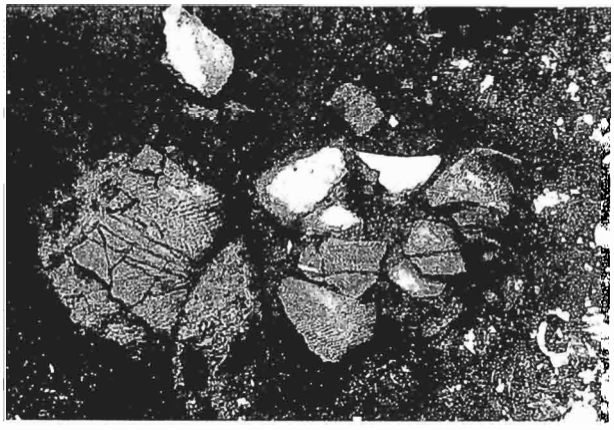


写真４　３区Ⅱ層遺物出土状態（南から）

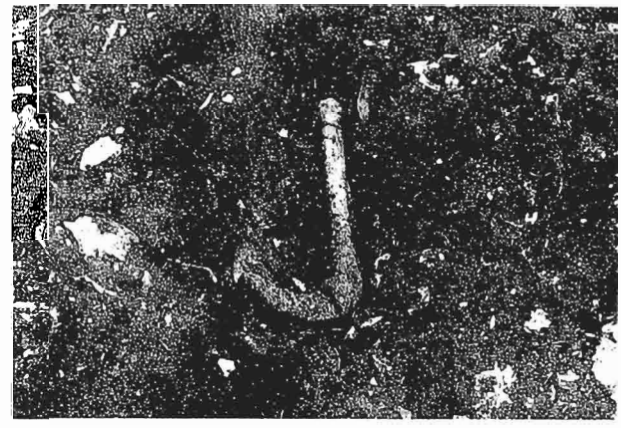


写真５　３区Ⅲ層上部鹿角製釣針出土状態（東から）

横浜市　中区No. 2遺跡（元町貝塚）

―縄文時代前期末葉～中期初頭の貝塚を中心として―

橋本 昌幸

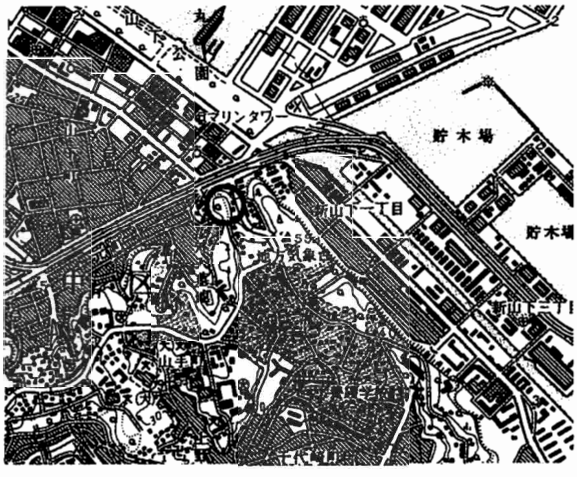
所 在 地　横浜市中区山手97番ほか
調査機関　財団法人　横浜市ふるさと歴史財団
調査担当　橋本昌幸・平子順一
調査原因　公園整備事業に伴う事前調査
調査期間　2006年1月27日～3月31日
調査面積　約500㎡

1．遺跡の立地

本遺跡は、みなとみらい線元町・中華街駅の南側、外国人墓地の北隣の台地上に位置する。横浜市域の東縁にあたるこの付近は下末吉台地に相当し、東京湾に臨む台地が連なる。遺跡をのせる台地は、関内地区の南側を東西に延びる樹枝状の台地の北端付近に所在し、谷戸坂を挟んでフランス山と並ぶ。眼下に広がる関内地区は、近世末まで大きな入り海だったが、新田開発により埋め立てられ、開港以降は一大商業地域として発展していった。これに伴って、渡来する外国人が増えると、山下に開設されていた居留地は手狭になり、台地上の山手へと拡張され、多くの外国人が住んだ。調査の対象となった当地にも関東大震災まで英国人医師が居住していた（註1）。

2．調査に至る経緯と調査経過

当該地は周知の埋蔵文化財包蔵地（中区No. 2）の範囲に含まれ、外国人墓地に接する南西側斜面では、古くから貝塚の存在が知られていた（註2）。地表面には一部縄文時代中期の土器片を伴う貝の散布等も確認され、遺跡が所在する可能性が考えられた。また、明治3（1870）年にアメリカ公使



第1図　遺跡の位置(1/25,000)

官邸として利用された建物が所在したとされていた場所でもある（註3）。

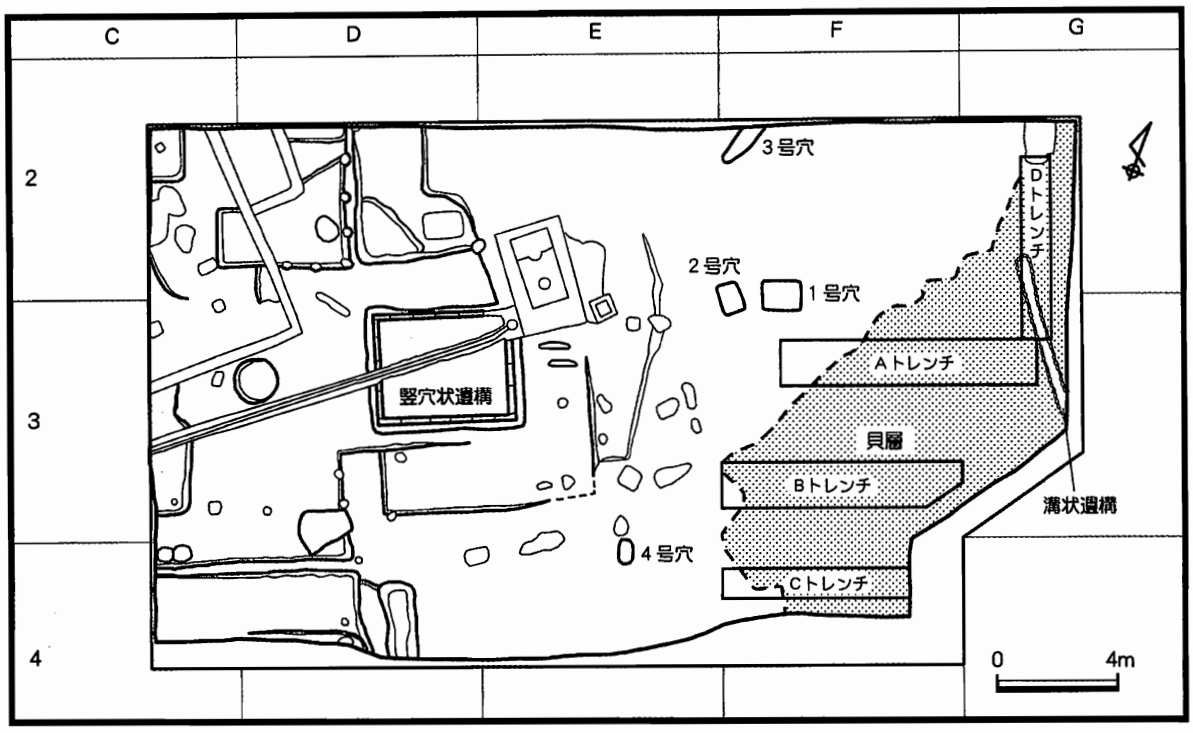
今回の調査は、当該地に（仮称）アメリカ山公園整備工事が計画され、これに伴う事前調査が必要となった。このため、横浜市の委託を受けて財団法人横浜市ふるさと歴史財団が、2006年1月より本発掘調査を行なった。

3．調査の概要

（1）出土遺構

今回の調査で検出された遺構は，縄文時代の斜面貝塚をはじめ、近世～近代の竪穴状遺構1基・溝状遺構1条・穴6カ所のほか、方形の浅い掘り込みや硬化面・ピットなどがある。

貝塚は、調査区東側の斜面部ほぼ全域を覆う褐色土の硬化面の下から検出された。東側の谷戸に向かって傾斜する斜面貝塚で、確認された貝層の広がりは、幅約20m・長さ約7mでさらに東側の崖面へと延びる。また貝層の厚さは、最深部で約1.5mを測る。貝層の西縁辺にあたる斜面上位の台



第２図　遺構分布図(1/500)

地頂部付近では、既にシルト層にまで達する削平が近世以降になされており、西限については定かではない。調査区南東側では、震災によって発生したがれきを埋めたと考えられる穴により一部撹乱されていた。貝層は、褐色土を主体とする明瞭な間層三枚を含め、大きく８層に分層される。貝層の堆積は、斜面上位から始まり、漸次下方へと移っていったようである。最下層の混貝土層からは前期末葉・十三菩提式の、最上層の灰層を主体とする層からは中期初頭・五領ヶ台式の土器が出土しており、この間に形成された貝塚と考えられる。貝塚を構成する貝種は主にアサリ・ハマグリで、ほかにカガミガイ・シオフキ・オキシジミ・サルボウ・オオノガイ・イタボガキ・マガキ・アカニシ・ツメタガイなどがみられる。

竪穴状遺構は、文化財課による試掘確認調査の際に存在が確認されたもので、中央付近では配管による溝状の撹乱がみられるが遺存状態は良好である。5.0×4.4mの長方形の掘り込みの壁面に、25×25×80cm の柱状の切石が一段ないし二段積まれ、床面にも隙間なく敷設されている。壁面を構成する切石の表面には漆喰の塗布が認められる。充填されている土中には、レンガ・ジェラール瓦や陶磁器などの破片とともに、使用されていた切石の一部が一括で投棄されている。

溝状遺構は、斜面部で検出された硬化面中に構築されており、遺構上面にも硬化面が広がる。幅約 0.5m、長さは確認されている部分で 10m以上を測り、斜面に直交する形で調査区域を縦断し、さらに外側へ延びる。掘り込みは明瞭でないが、

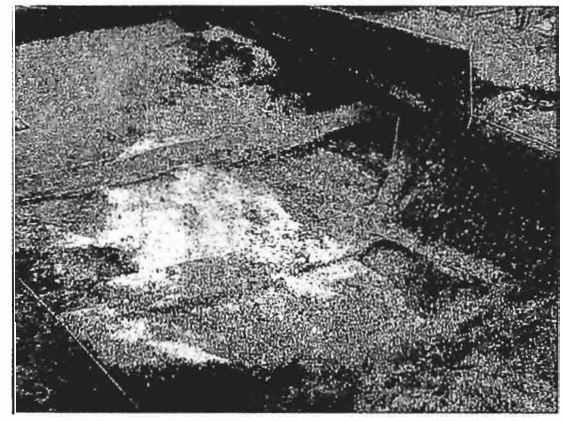
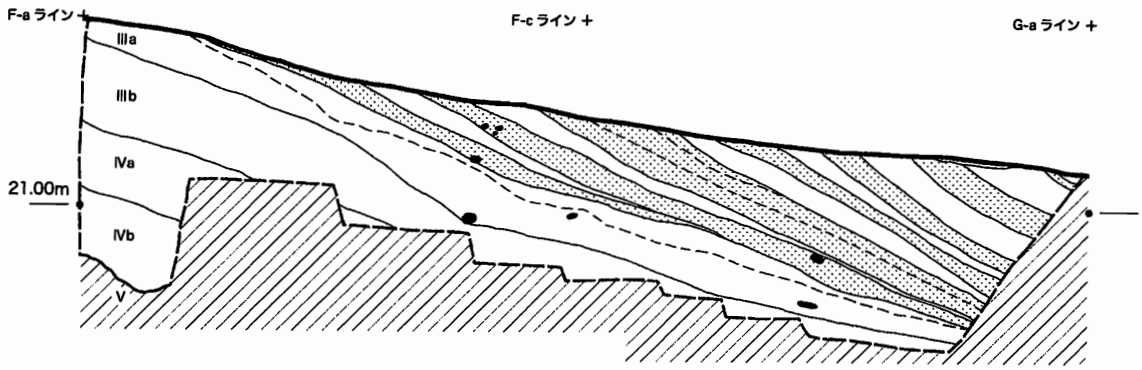


写真１　貝層の範囲(南西より)



第３図　Ｂトレンチ北壁断面図(1/60)

川原石を使用した石敷きの溝で、10～20cm の縁石と 10cm 内の底石とで構成される。断面形状は船底形で、中央付近が窪む。縁石を補修ないしは補強するように和瓦が埋設されており、底石の直上からも出土している。所産の時期や性格については今後検討を進めるが、形状より排水等の機能を有していたものと推測される。

（２）出土遺物

貝塚を中心に、縄文時代前期末～中期初頭の土器・石器および骨角器が多数出土している。また貝層下の褐色土からは、縄文時代早期の土器片が若干みられる。近世～近代にかけては、レンガ・陶磁器・ジェラール瓦のほか和瓦も数点出土している。

４．まとめ

今回の調査では、縄文時代・近世～近代の遺構が検出された。

縄文時代については、縄文時代前期末・十三菩提期から中期初頭・五領ヶ台期にわたる貝塚が検出された。この場所では、台地南側斜面に貝塚が存在することが従来から知られており、元町貝塚とされていたが、東斜面にも貝塚が形成されていたことが新たに確認された。出土遺物などから、両貝塚はほぼ同一時期のものと考えられ、該期に極めて大規模な貝塚が形成されていたことが判明した。貝層はさらに東側へと広がっており、今後この部分についても調査が必要となろう。

近世～近代については、竪穴状遺構・溝状遺構などの掘り込みや硬化面が検出された。竪穴状遺構は切石を使用した石組みの遺構で、竪穴状に掘り込まれた底面に切石を敷設して床面としている。柱穴などの付属施設は全くみられず、半地下式の室である可能性が考えられる。溝状遺構は石敷きで、中央部が窪む。雨落ち溝とも考えられたが、建物の痕跡がなく、南東へ傾斜していることなどから否定されよう。硬化面は東側斜面部を中心に顕著に施され、台地頂部の削平面から続く平坦面を形成している。また該期に比定される浅い掘り込みやピットなども確認されており、今後文献資料等を精査したうえで検討したい。

（註１）「BLUFF Directory」によると、1879 年以降 E.Wheeler の名がみられる。

（註２）塚田明治「横浜市中区元町貝塚の現状調査」『横須賀考古学会年報』17（横須賀考古学会　1974 年）

（註３）青木佑介「明治初期におけるアメリカ公使官邸の建物とその所在地について」『横浜市都市発展記念館紀要』1（横浜市都市発展記念館　2005 年）で否定されている。

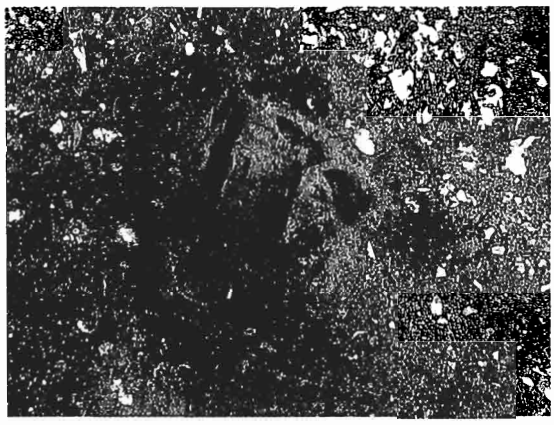


写真２　貝層から出土した土器

写真３　貝層から出土した土器

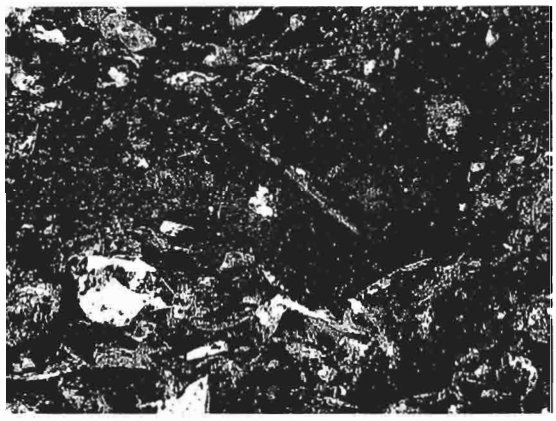


写真４　貝層から出土した骨角器

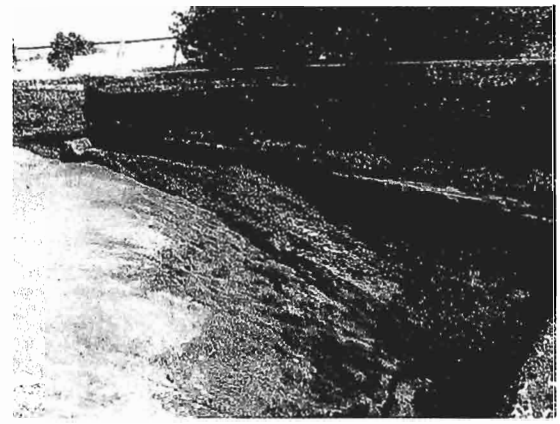


写真５　調査区断面（西より）

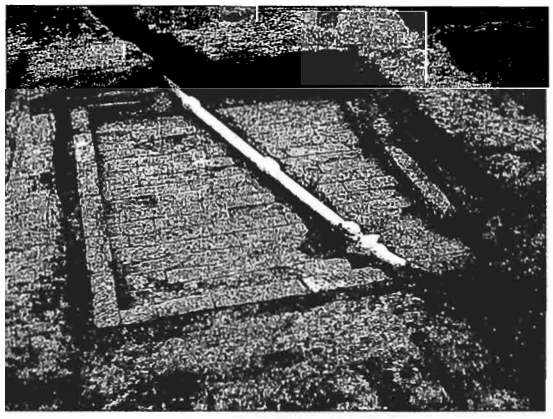


写真６　竪穴状遺構（東より）

写真７　溝状遺構（北西より）

平塚市　湘南新道関連遺跡

―廂の付された大型掘立柱建物と連房式鍛冶工房を中心として―

柏木　善治

所 在 地　平塚市四之宮３丁目 旧幹道５号線 他
調査機関　(財)かながわ考古学財団
調査担当　柏木 善治・須藤 智夫・田村 良照
調査原因　都市計画道路３・３・６号湘南新道街路整備事業に伴う事前調査
調査期間　2006年７月１日～９月15日、10月16日～12月31日（H17年度）
調査面積　約794㎡（H17年度）

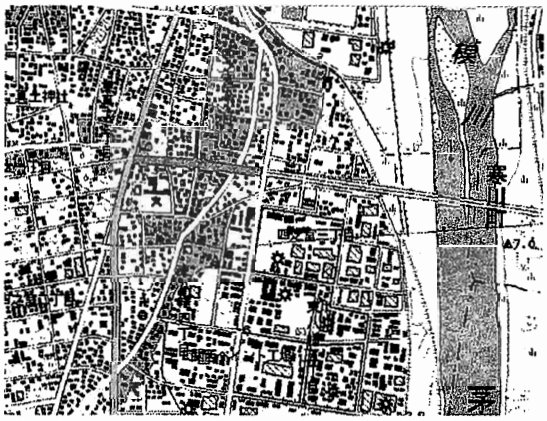
１．遺跡の立地

遺跡は平塚市北東部で、JR平塚駅の北東約３km、相模川からは西方0.5kmに位置する。南西に市立大野小学校があり、北東の相模国四之宮である前鳥神社までは0.3kmの距離がある(第１図)。

地形区分上では相模川右岸の砂丘･砂州、砂丘間凹地、及び自然堤防上に立地し、南東方に近在して相模川の段丘崖がある。周辺は市街化が進み、現況の地形はほぼ平坦となる。

２．調査に至る経緯と調査経過

湘南新道関連遺跡は、平成12年(2000/７)より平成17年(2005/12)まで、断続的ながら50.5ヶ月で約9,000㎡の発掘調査を行った。現在整理作業中で、報告書は今後刊行していく予定となっている。調査原因は神奈川県県土整備部平塚土木事務所による、都市計画道路3･3･6号湘南新道街路整備事業に伴う記録保存調査である。事業地内には大会原遺跡(№188)・坪ノ内遺跡(№189)・六ノ域遺跡(№191)があり、湘南新道関連遺跡はこれら遺跡の総称となる。平成17年度は、六ノ域遺跡として周知された一角を対象に計５地点で調査を行った。



第１図　湘南新道関連遺跡位置図

３．調査概要

ここでは、過去６年に渡り発掘調査を行った遺跡の内容について記すこととする(第２図)。

遺跡内で最古の遺物となるのは縄文時代中期の土器片で、少数が砂層上面より出土している。遺跡東端では古墳時代初頭となる方形周溝墓が整然と検出され、中世後半には70基以上となる土壙が存在し、墓域内には１基の鍋被り葬も認められた。

奈良～平安時代は、遺跡西半を中心に重複密集しながら夥しい数の竪穴住居が検出され、南西では掘立柱建物が多く存在する。北西及び中央付近では谷地形となり、溝や井戸など水利に関する遺構がある。東半では大会原遺跡や竪穴住居の他、連房式鍛冶工房などの鍛冶関係遺構が存在する。遺物は土師・須恵器、灰釉・緑釉陶器(香炉蓋含)、青磁、瓦(軒平・丸)、金銅製品(小仏像・刀装具・飾金具)、鈎帯(かたい)、鉄製品(焼印・馬具等)、鉄滓(椀形含)・羽口・鍛造剥片・粒状滓、銅製品(鈴等)、石製品、人骨、獣骨などが出土した。

●廂の付された大型掘立柱建物

坪ノ内遺跡と六ノ域遺跡で発見され、両遺跡の建物は 80m程度(棟外端を計測)の距離を画して

並立する大規模な南北棟である。建物の外側には一時期掘立柱塀が廻り、その間隔は約86mを測る。廂の付される建物では相模国最大で、国庁の脇殿とも目される。

平成16年度に発見された坪ノ内遺跡の建物は、軸方位をほぼ南北方向に持ち、母屋は桁行9間(22m)以上、梁行3間で、建物内に間仕切りの柱は存在しない。東西に廂が付され、建物の東側には掘立柱塀がほぼ同軸で展開する。母屋となる柱穴は長さ1.5m、幅1.0m程の規模で、深さは条件の良いもので 1.2m程度を測る。柱穴は母屋と廂で底面標高において、およそ50㎝ほどの高低差があり、母屋柱穴の方が深いものとなっている。廂や掘立柱塀も含め他遺構の重複から柱穴が判明した例が多く、確認面での判別は困難を極めた。柱痕は土層断面や底面硬化により確認されたが、半裁によりその微妙な変化から柱痕跡の存在を確定し、それらを繋ぎ合わせて想定ラインを作成、半裁位置を設定することの繰り返しであった。

母屋の柱穴が底面で段差を持つことや、土層断面の観察から1回以上の建て替えが行われていることが考えられる。柱穴は北及び北東に存在するものが不整形ながら方形を呈し、南及び南西にあるものが東西軸の長方形となる印象である。これらから大型建物は、建て替えに際して北東を基点に南西を東側に1.5度軸を振っていることも考えられ、初期建物は掘立柱塀と同軸、建替建物は廂と同軸という印象である。また、ほぼ同じ場所に建て替えられていることが柱の重複加減より併せて窺え、片廂で掘立柱塀を伴う建物から、二面廂で塀は伴わない建物へと変わったことが考えられる。

出土した遺物から受ける印象は、相模型坏出現(8c 中葉)以前の土器が多く出土したというものである。それらは柱穴掘方からの出土であり、建設時に混入したことが考えられる。他遺構との重複関係を鑑みても、同様の年代観が推察されるものであるが、今後の詳細な検討が必要であろう。

平成17年度に発見された六ノ域遺跡の建物も、調査面積が狭小ながら柱穴の形状や規模、覆土の状況、出土遺物などから同時期・同規模の建物と考えられる。また、この建物の柱穴に壊されるように同規模の柱穴が主軸を違えて存在し、これは脇殿建設前段階の建物としての想定もされる。

●連房式鍛冶工房

連房式鍛冶工房は六ノ域遺跡において2棟検出され、60m程の距離を画して存在する。いずれも長大な竪穴状の遺構であるが、鍛冶炉の配列は両者で異なる。

平成15年度に発見された西側の工房は、遺構確認段階から多くの鉄滓が検出され、工房西半を中心に覆土中からも大量に出土した。工房は東西約13m、南北5m以上を測る長大な竪穴状の遺構で、周囲の壁を切り込むように柱穴が8穴検出された。竪穴内部にも柱穴は散見されるが、外壁の柱穴と対応するような配列は確認されていない。西壁際には低位なテラス状の廃滓場があり、椀形滓を中心とした滓の一時的な捨て場であると想定される。また、工房から北に少し離れた土坑からは、椀形滓や羽口片などが多量に出土しており、これは工房の仮捨て場より敷地外へ廃棄された現象として捉えられる。

工房では鉄の精錬(鍛錬)を中心に行われていたことが考えられ、鍛冶炉は18基が確認されている。そのうち 16 基が2基1対で東西に整然と並列している。鍛冶炉は大きさが径40㎝程度とほぼ揃い、いずれも粘土により構築される。浅い皿状の印象で、東西方向には掻き出し口がある。炭の集中が見られ、ピット状の浅い窪みをなす。南北方向には羽口の装着に関係すると考えられるやや幅狭な浅い溝が存在する。内面は粘土が堅く焼き締まり、一部の鍛冶炉では鉄滓及び銅小片が付着していた。そのうちの鍛冶炉北列は、いずれも西側の窪みで炭化物が多く、鍛冶炉南列ではそれが東側となり、逆の現象が観察されている。

並列するものから外れた2基の鍛冶炉は、竪穴

住居に敷設されるカマドのような印象である。東壁際のものは全容が確認されていないが、粘土による壁が東西に対で存在し、覆土には炭化物が多量含まれる。中央付近のものは「U」字型に粘土がまわり、内部に土師器甕底部片を逆位に使用した支脚が設えられ、粘土による壁の外側は土器の破片が縦位に充填され、崩壊防止の工夫がされる。

出土遺物は羽口や椀形滓及び鉄滓、鍛造剥片・粒状滓、砥石、鉄鏃・釘・刀子などの鉄製品、金銅製飾金具、土師器・須恵器・灰釉陶器などの土器が出土している。床面近くから出土した土師器坏は平安時代前半とみられるが、鍛冶炉埋土から出土したものは平安時代後半～末となり時期を画すものとなる。鍛冶炉の重複関係や炭化物から得られる情報など、土器以外の状況なども加味する必要があり、年代の比定は今後の課題である。

平成17年度に発見された東側の工房は、調査面積が狭小ながら、東西約17mの竪穴状の遺構として検出された。竪穴周囲の壁に柱穴が見られることや、床面での段差などは西側の工房と同様となる。しかし、鍛冶炉は3基程しか存在せず、鍛冶炉の掻き出し口は南北方向となり西側の工房とは相違する。遺物は鉄滓類の他、土器の出土もあるが、それら遺物の時間幅が広いことは両者で共通する。

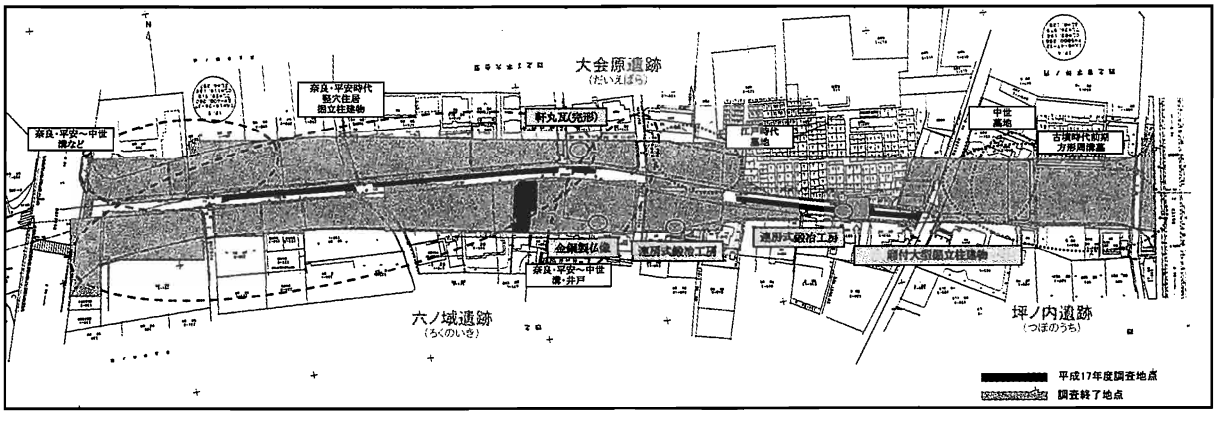
4．まとめ

調査地点の周囲は、古代相模国の行政的拠点である国府の有力な推定地に比定されている。廂の付された大型掘立柱建物の性格は、その軸方位と建物規模、廂の付される格式の高さ、間仕切りとしての柱が存在しないこと、両建物の間に占める空間、囲繞すると考えられる掘立柱塀の存在などから、国庁脇殿と考えられるものである。出土遺物からは奈良時代前半に係る建築と考えられる。規模や立地からも、初期国府の所在に関して考えていく上で一石を投じるものである。

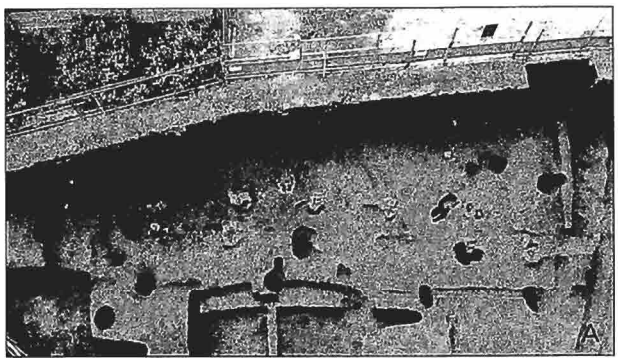
鍛冶工房はその規模や作業内容からも国衙の官営工房と考えられるものである。遺跡に隣接して発見されている一棟を含めた三棟が距離を画して併存していたこととなるが、時期や操業スタイルが同様であったかは今後の検討が必要である。

これらを踏まえ、遺跡内における古代の景観を考えたとき、西半は国衙関係者の居住域、東半は奈良時代の役所、平安時代にかけては官営工房へ変化するという土地利用の変遷が見えてくる。

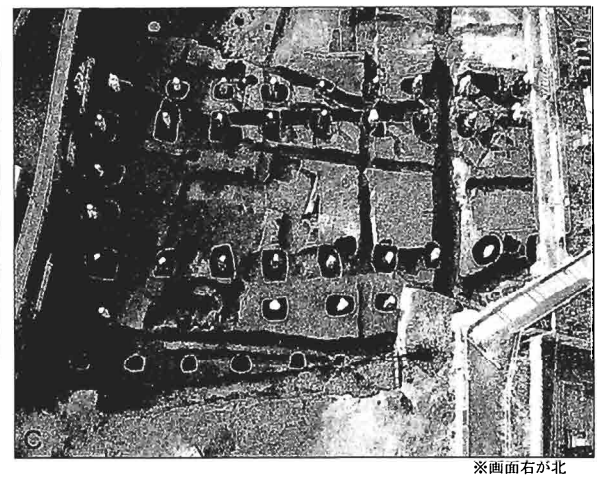
今後は、現在までに調査の進んでいる国庁を取り巻く諸遺構の検討を踏まえ、居住域及び曹司などに係る様々な施設との整合性や景観復元、国府移転に至る時期の状況などが、現在の資料からどのように見えてくるかの考察も必要であろう。



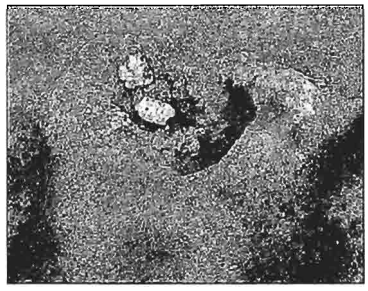
第２図　湘南新道関連遺跡概念図



※画面下が北



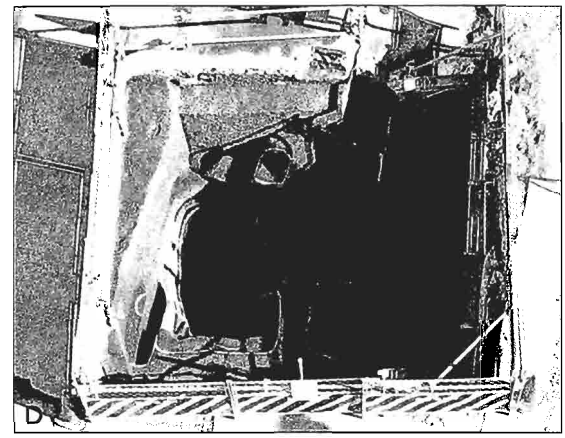
※画面右が北



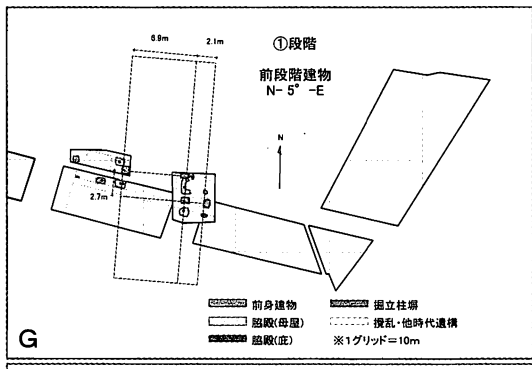
A:六ノ域
連房式鍛冶工房

B:六ノ域
工房鍛冶炉

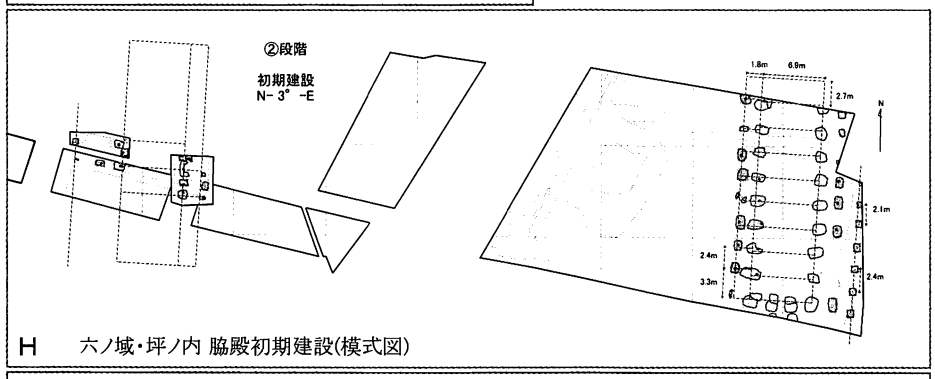
G:六ノ域 脇殿前段階
建物(模式図)



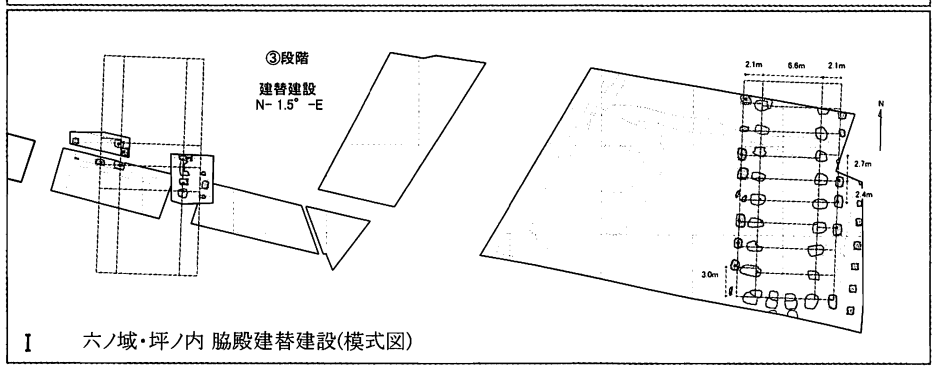
※画面左が北



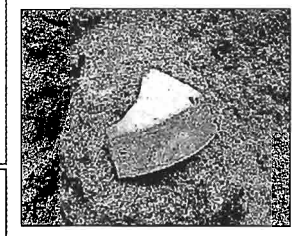
G



H　六ノ域・坪ノ内 脇殿初期建設(模式図)



I　六ノ域・坪ノ内 脇殿建替建設(模式図)



C:坪ノ内 大型掘立柱建物
(東脇殿)

D:六ノ域 大型掘立柱建物
(西脇殿)※一部

E:六ノ域 大型掘立柱建物
出土須恵器蓋

F:坪ノ内 大型掘立柱建物
出土土師器坏

茅ヶ崎市　小出川河川改修関連遺跡群（七堂伽藍跡）

—古代と弥生時代の河道跡—

小川　岳人

所 在 地　小出川河川改修関連遺跡群：
茅ヶ崎市下寺尾4－1他

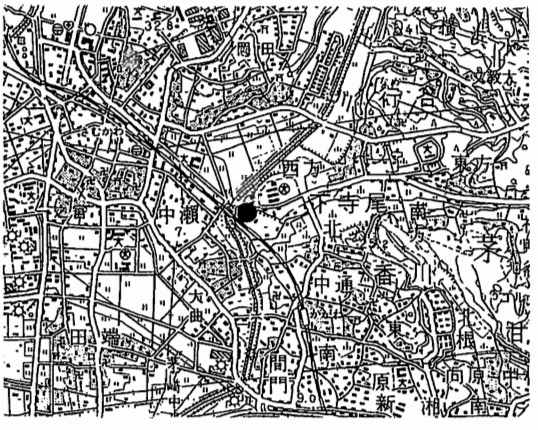
調査機関　(財)かながわ考古学財団

調査担当　小川　岳人・柏木善治・田村良照

調査原因　小出川河川改修およびその関連工事に伴う事前調査

調査期間　平成17年4月1日～7月15日

調査面積　954㎡



第1図　調査位置図（1/10,000）

1．遺跡の立地

遺跡は茅ヶ崎市と寒川町の境界にある小出川の東岸に位置する。遺跡が所在するのは、高座丘陵から西方に突出する台地に接した砂丘とその周辺の低地に相当する。この砂丘は湘南砂丘列の最奥部に相当し、標高7～10m程度を測る。砂丘は西側を小出川に画され、南側をその支流駒寄川の流れる低地に面する。北～東側を高座丘陵に囲まれ、遺跡からの視界は、西から南に広がる。

七堂伽藍跡については、茅ヶ崎市教育委員会による継続的な調査によって、多くの知見が積み重ねられつつある。これまで、寺域の東側を画すると推定される掘立柱列・溝を検出した他、寺院に関連するとみられる鬼瓦・銅匙・二彩香炉等多数の遺物を発見している。また、当遺跡の背面の台地上に位置する西方A遺跡では、(財)かながわ考古学財団による調査において正倉と考えられる総柱の掘立柱建物群と正殿と脇殿からなる建物群が検出され、高座郡衙に比定された。台地下に位置する七堂伽藍跡と密接な関係性を有していたことが推測される。

2．調査に至る経緯と調査経過

小出川河川改修関連事業は、茅ヶ崎市西端の下寺尾157～159番地付近および、小出川を挟んだ高座郡寒川町岡田577番地付近、同大曲2－24付近を対象として実施が予定されている事業で、事業予定地内には茅ヶ崎市西方A遺跡、同七堂伽藍跡、寒川町南大河内遺跡、同№76遺跡の4遺跡が所在し、(財)かながわ考古学財団では、平成13年度以来断続的に調査を実施している。平成17年度は、Ⅰ区西地区とⅢ区西地区、E区東地区の調査を実施した。

3．調査の概要

（Ⅰ区西地区）Ⅰ区西地区は、平成13年度調査のⅠ地区の西側、平成14年度調査のF地区の北側に位置し、地形的には台地裾部の微高地と低地の境界線に相当する。本調査区では古代の河道跡を検出した。Ⅰ区西地区の南側に隣接する調査区では平成14年度の調査で古代の河道跡を検出し、本調査区で検出した河道跡はこれに続くものである。川底面は礫で覆われており、その上に遺物を包含する砂層がのっていた。また、河道跡は1本

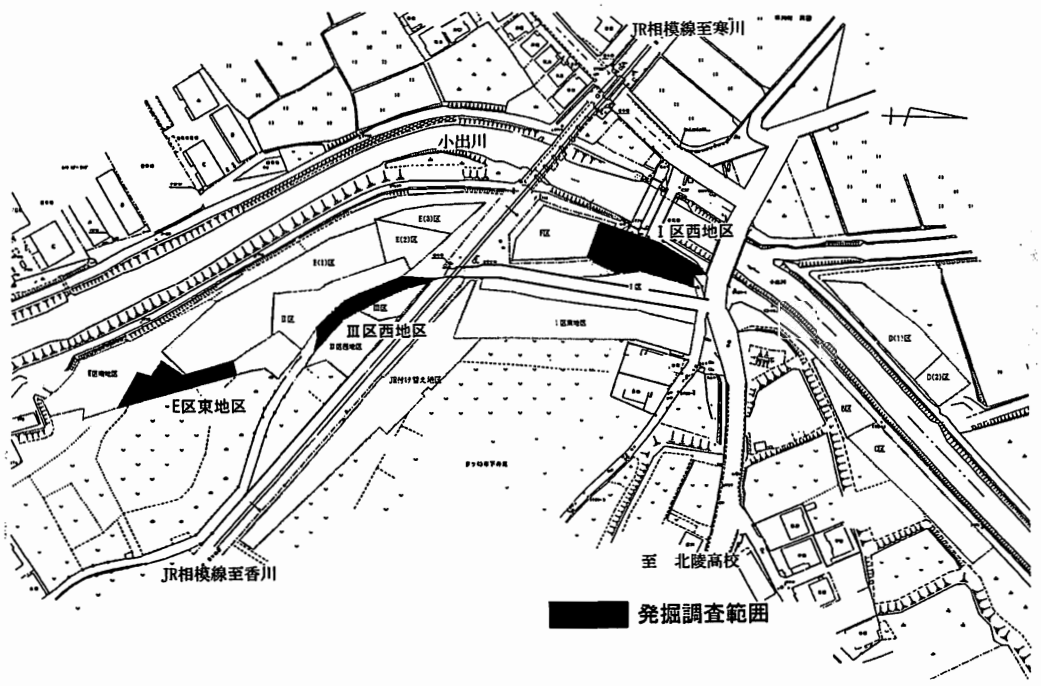
ではなく、新旧の２本が切り合っている状況を断面で観察している。出土遺物から時期的に先行する河道跡は８世紀、これを切る新しい河道跡は９世紀以降のものと判断される。９世紀の河道跡には、河床面を覆う砂層上に松の枝・松毬・樹皮を多量に含む泥炭状の層が形成され、さらにその上に焼土・炭化物・10～11 世紀の遺物を多数含む暗褐色土が堆積している。この９世紀の河道は 10 世紀には低湿地化したものと考えられる。この河道跡からは祭祀遺物と見られる刀形木製品が出土し希少な事例として特筆される。

（Ⅲ区西地区）Ⅲ区西地区は、平成 14 年度調査のⅢ地区および平成 16 年度調査のⅢ区東地区の西側に位置し、地形的には微高地の西縁に相当する。本調査区では竪穴住居址 11 軒、掘立柱建物址２棟他の遺構を検出した。これらのうち６軒が従前の調査で検出した住居址の一部であり、３軒が今年度の調査で初めて検出した住居址となる。

（E 区東地区）平成 13 年度に調査を実施した E 地区と平成15～16年度調査のE地区南地区に挟まれて位置する。平成 16 年度に中・近世面および古代面の北半部までを調査し、今年度は、南半部で確認した弥生時代後期～古墳時代前期面の調査を実施し、平成 14 年度に調査した弥生時代後期河道跡の継続部分と古墳時代前期の河道跡を調査した。河道からは、多数の木製品が出土したが、特に弥生時代河道跡出土のエブリと、古墳時代河道出土の棒梯子は弥生時代～古墳時代前期の製品としては希少なものであり、ともに特筆されてよい。古墳時代の河道跡中層には、古墳時代前期の遺構内に特徴的に検出される大粒の黒色スコリアが堆積し、その降灰時には既に水が流れていなかったと判断される。なお、この河道跡は、その後も窪地ないし低湿地として存在したようで、覆土最上層からは、古墳時代後期の坏が出土している。

４．まとめ

平成 17 年度の調査は低地部分中心の調査となったが、弥生時代後期、古墳時代前期、古代（８・９世紀）の河道跡が発見され、これまで調査してきた砂丘上の集落と水辺の関わり、また各時代ごとの遺跡の景観変遷を考える上で極めて有意義なものとなった。



第２図　小出川河川改修関連遺跡群　調査区配置図

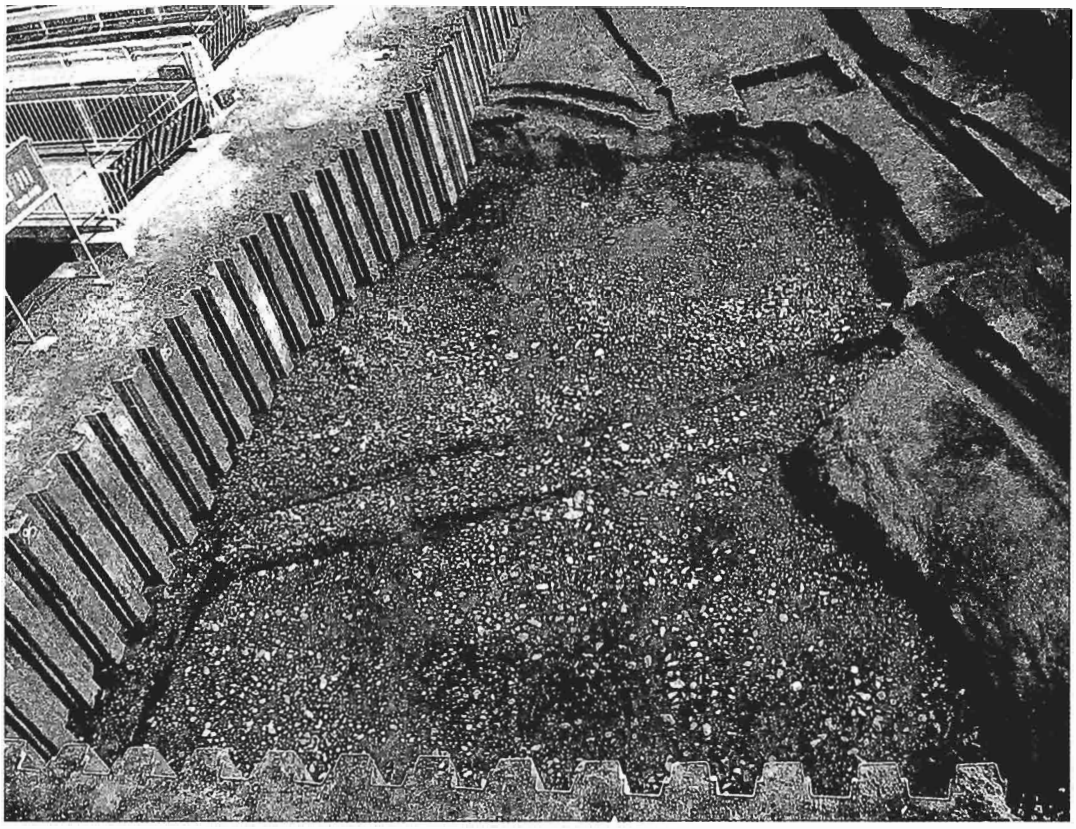


写真１　Ｉ区西地区　古代の河道跡

写真２　Ｅ区東地区　弥生～古墳時代前期の河道跡

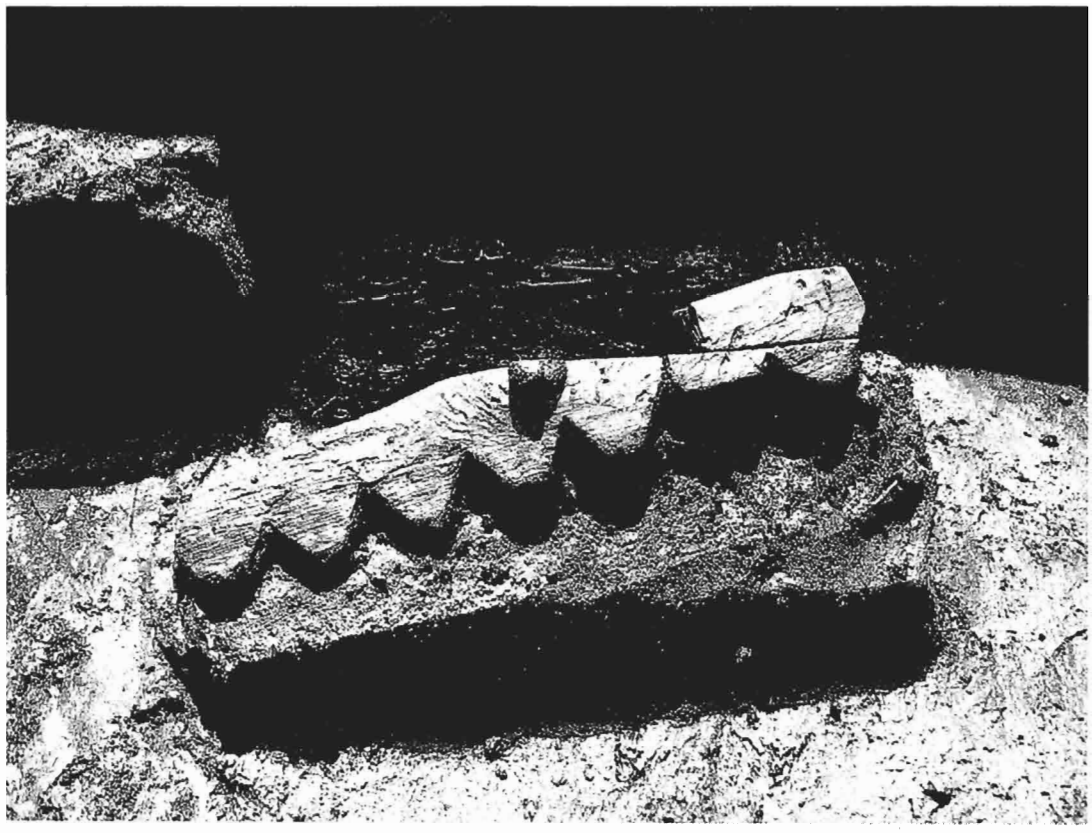


写真３　弥生時代の河道跡から出土した農耕具（えぶり）

写真４　古墳時代前期の河道跡から出土した棒梯子

川崎市麻生区　上麻生日光台遺跡

―古代の大型掘立柱建物跡群―

渡辺　務・宮重　俊一

所 在 地　上麻生日光台遺跡：川崎市麻生区上麻生５丁目内

調査機関　株式会社日本窯業史研究所

調査担当　渡辺　務・宮重俊一

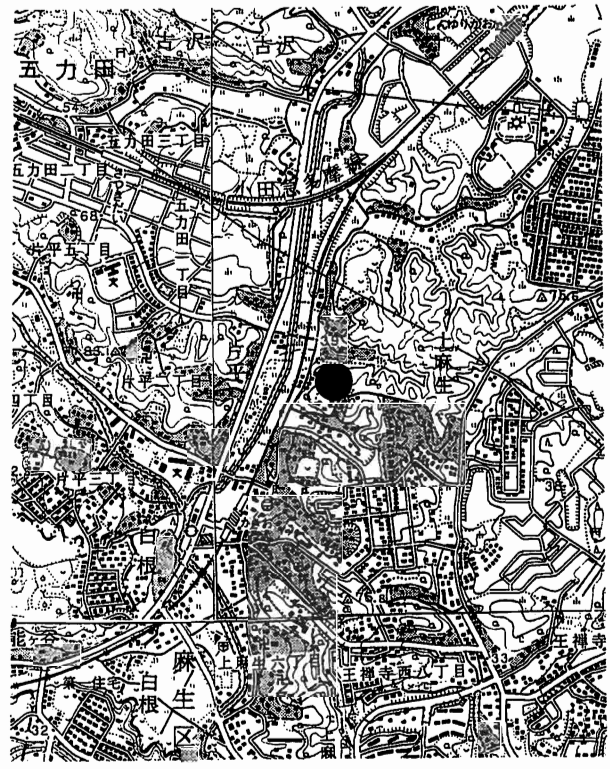
調査目的　都市計画道路尻手黒川線整備事業に伴う事前の埋蔵文化財発掘調査

調査期間　2005年(平成17年)11月７日～2006年(平成18年)３月28日

調査面積　2,900 ㎡

１．遺跡の立地

上麻生日光台遺跡は、川崎市麻生区上麻生５丁目内に位置する。交通的には小田急電鉄柿生駅より北東約0.8kmの地点で、西側を小田急電鉄小田原線と主用地方道世田谷町田線が北東から南西方向に併存して通り抜けている。川崎市の北部に位置する麻生区は東京都南西部から川崎・横浜市北部に広がる多摩丘陵の南端部分で、多摩川及び鶴見川水系の中小河川が丘陵内を樹枝状に開削する複雑で若干の起伏をもつ地形である。遺跡は鶴見川支流の麻生川を西側に見下ろす台地状の丘陵地で川に向い東より西へと下る斜面地に立地する。丘陵尾根部にあたる調査区東側はやや急斜面であるが調査区中央より西側及び南側付近は緩やかになり、ほぼ平坦地となる。遺跡周辺には本跡とは谷戸を挟んだ北側600mの地点に位置し、古代の竪穴住居跡や掘立柱建物跡を多数確認した山口台遺跡群上台遺跡をはじめ、大ヶ谷戸遺跡、葉積台遺跡、五ヵ田東遺跡、五ヵ田西遺跡、仲町遺跡など多くの遺跡がある。



第１図　調査位置図（1/25,000）

２．調査に至る経緯と調査経過

川崎市上麻生日光台遺跡は周知の遺跡として県遺跡№49、川崎市遺跡番号王禅寺－4遺跡と登録されている。本跡の一部は山口台地区区画整理事業に伴い1983年（昭和58年）５月に山口台遺跡群日光台遺跡として試掘調査が実施されたが急傾斜地で若干の遺物は出土したものの、遺構は確認しなかったため、1984年（昭和59年）から実施された本調査の調査対象からは外されている。今回の調査は、都市計画道路尻手黒川線整備事業に伴うもので、整備工事予定地の内、本遺跡は川崎市教育委員会による試掘調査が2005年４月に実施された。この結果、竪穴住居跡などの遺構が確認

されたため工事に先立つ事前調査が必要となった。このため、事業主である川崎市建設局の委託を受けた株式会社日本窯業史研究所が川崎市教育委員会の指導の下2005年(平成17年)11月7日～2006年（平成18年）3月28日の期間で埋蔵文化財発掘調査を実施した。

３．調査の概要

上麻生日光台遺跡からは縄文時代、古墳時代後期～古代、近世など各時代の遺構・遺物を確認した。遺跡は調査区中央付近から西側及び南側の範囲が既存建物を解体した更地で、建物や解体の際の攪乱がローム層にまで掘り抜かれている部分が随所にみられ各遺構の遺存状況は良好とはいえない。

縄文時代

縄文時代の遺構は竪穴住居跡、土坑、炉穴などである。竪穴住居跡は21軒、いずれも同時代中期で調査区内全般に分布していたが勝坂期のものは調査区中央から北側にかけて、加曽利Ｅ式期のものは調査区中央から南側にかけてそれぞれ分布している。平面形は円形、楕円形、隅丸長方形。規模は４～５ｍ前後で床面に炉を設け、4～5口の主柱穴を、壁際には周溝ないしは小穴を並べた壁柱穴を配し、数度の立替をなされたものが大半である。炉跡は土器の上半部を埋設した埋甕炉、川原石を並べた石囲炉、床面を浅く掘り窪めた地床炉などがある。竪穴住居跡に伴う遺物は中期勝坂期後半と加曽利ＥⅡ式期に属する土器が主体であるが、SI05からは阿玉台式土器と勝坂期前半の土器が共伴して出土する。他には土器の破片を丸く削り取った円形土盤、打製石斧などがある。土坑は５口を確認した。いずれも調査区中央から西側にかけて分布し、大半が所謂、落とし穴タイプであるが、SK10は袋状土坑である。炉穴は１口を確認した。

古墳時代～古代

古墳時代後期～古代の遺構は竪穴住居跡11軒、掘立柱建物跡12棟、土坑15口、溝１条、道路跡１条などを確認した。出土遺物は土師器、須恵器、灰釉陶器、緑釉陶器の土器、陶器類、鉄斧、鉄釘、刀子の鉄製品など古墳時代後期から古代の遺物が出土している。これら確認した遺構で特筆されるのは掘立柱建物跡群を中心とする古代遺構群である。大半は２間×３間の規模であるが、SB02、03、04の3棟は梁行３間(5.6～6.4m)桁行５間(10.8～12.5m)床面積が60.4～80㎡と掘立柱建物跡のなかでも大型の規模を有し、遺存状況の良好な柱の掘り方は1.8m前後と深く掘り込まれている。建物の配置も主軸方向を東西または南北の方位とほぼ合致させ、それぞれ建物跡の柱の配列を揃えてＬ字ないしはコ字状に整然と配置している。またSB04、06、07、08の掘り方は一部が重複し合い覆土の土層観察からは数段階の変遷が認められる。また、掘立柱建物跡群の周囲には同時期の竪穴住居跡が付設されるように配置されている。このうちSI18は7.3×4.2m、SI19は6.0×4.2mと規模が比較的大型で平面もカマドに対して長軸方向が横長に伸びた長方形である。また土坑群は調査区中央付近を中心に分布し、平面は円形もしくは長方形で覆土中には焼土や炭化物を含む。遺跡の東側で調査区内を南北に縦貫する道路状遺構を確認した。硬化面は認められなかったが両端を溝状遺構がほぼ2.5mの幅で平行し走っている事から道路状遺構と判断した。

これら遺構の時期については一部の住居跡で異なる時期のものもあるが、掘立柱建物群や竪穴住居跡に伴う遺物は９世紀後半が主体であった。また遺物の大半は土師器、須恵器が出土し、坏類が圧倒的に多く、甕など煮沸形態の遺物は少ない。また少量であるが灰釉陶器、緑釉陶器、土錘も出土している。土坑群からはロクロ土師器、灰釉陶

器、緑釉陶器などが出土している。

近世

近世の遺構は段切遺構である。遺構に伴う遺物の出土はなかったが、覆土に宝永スコリアが含まれていた。

4．まとめ

以上のように、上麻生日光台遺跡の古代の掘立柱建物跡群を主体とする古代遺構群を中心に報告した。

一般集落で発見される掘立柱建物跡は２間×３間の規模が最も多く、その性格としては竪穴住居跡と相互関係の居住施設と理解されている。それに対して本遺跡の掘立柱建物群は SB02、03、04 の３棟の掘立柱建物跡のように比較的大規模な建物もあり、主軸方向や建物同士の柱の配列をある程度揃えるなど、企画に基づいた配置をしている事が伺われる。また SB06 の掘り方からは埋納したと思われる坏形の須恵器が出土するなど、一般集落の掘立柱建物跡とは異なる特質をもっていると言えよう。一方、国衙や郡衙施設とされている遺構と比較すると建物の規模や配置などで見劣りする点が多い。近年、県内の遺跡ではこのような郡衙とは捉えられないが、一般集落とも異なる大型の掘立柱建物跡を中心とした古代遺構群の遺跡が各地で発見されている。このような遺跡の性格として国衙や郡衙と在地の一般集落との間に介在する郷家・倉・交通関係・仏教施設などの公的施設、あるいは郡司・郷長などの支配階層の私的な邸宅など様々な視点から検討され、議論が行われている。

遺跡のある川崎市麻生区の古代における行政区分は武蔵国都筑郡に属すると思われ、付近を橘樹郡・多麻郡（多摩郡）が近接しているなど行政区分の入り組んだ地域でもある。本遺跡の周辺には古代の遺構を確認した遺跡が多く見つかっているが、特に北側 600mの地点に隣接する山口台遺跡群上台遺跡は、３面の庇を持つ東西棟の大型建物跡と南北棟の建物跡２棟を配置し、竪穴住居跡を伴う建物跡群を含む古代遺構群を多数確認されるなど、本遺跡を考える上で重要な位置付けがなされると思われる。

今回、確認した古代遺構群がどのような性格を持つかについては、遺跡内遺構の変遷や配置だけではなく、地域全体を含む様々な視点から検討を加える必要があるだろう。

（文責：宮重）

引用・参考文献

北原實徳　1987　『川崎市麻生区山口台遺跡群』　日本窯業史研究所

小渕忠秋ほか　1988　『川崎市史　資料編１』　川崎市

呉地英夫ほか　1988　『川崎市麻生区大ヶ谷戸遺跡発掘調査報告書』　大ヶ谷戸遺跡発掘調査団

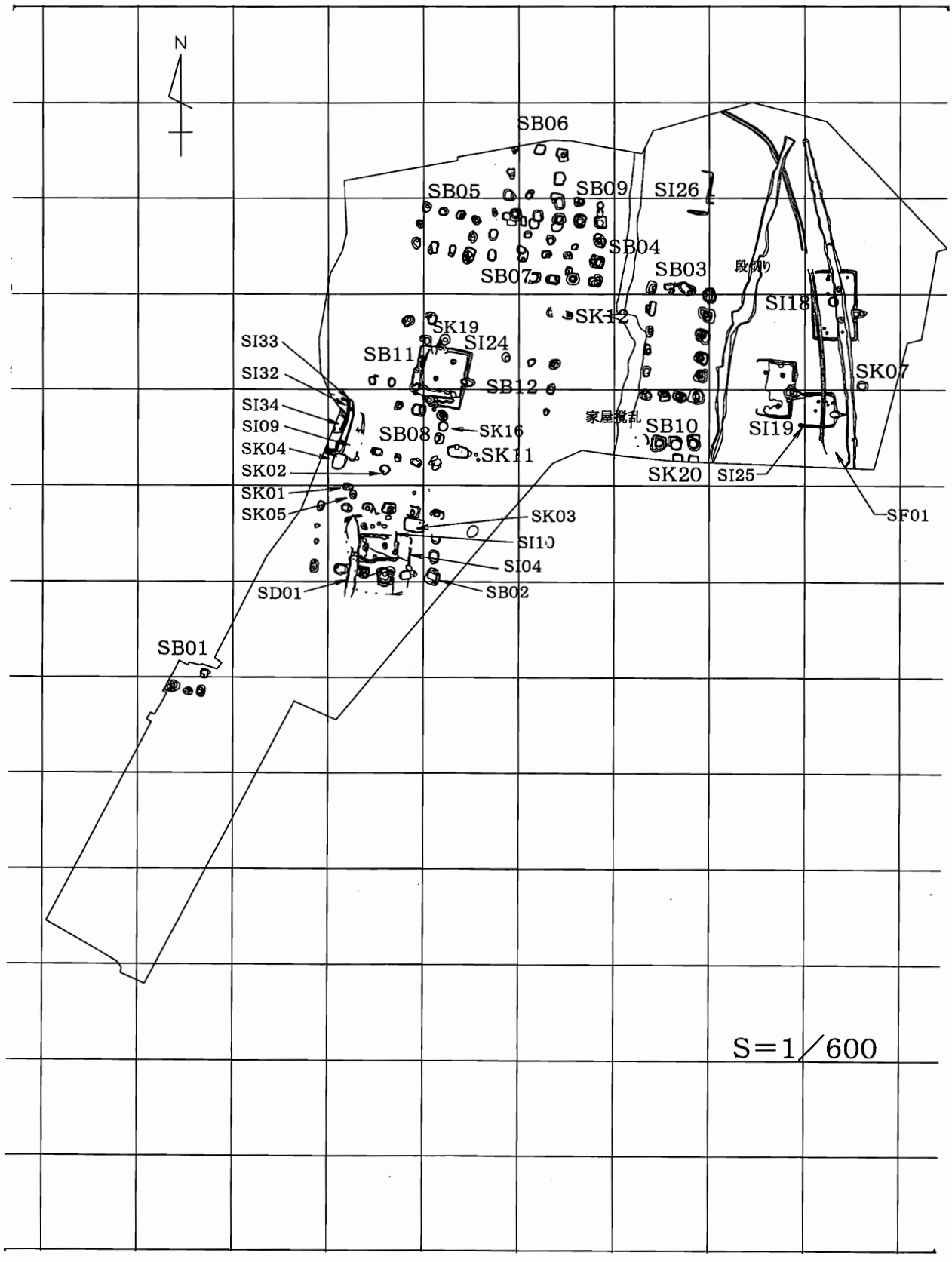
林原利明ほか　1997　『上麻生大ヶ谷戸遺跡』　上麻生大ヶ谷戸遺跡発掘調査団

松浦宥一郎ほか　1977　『多摩』　多摩線沿線地区埋蔵文化財発掘調査委員会

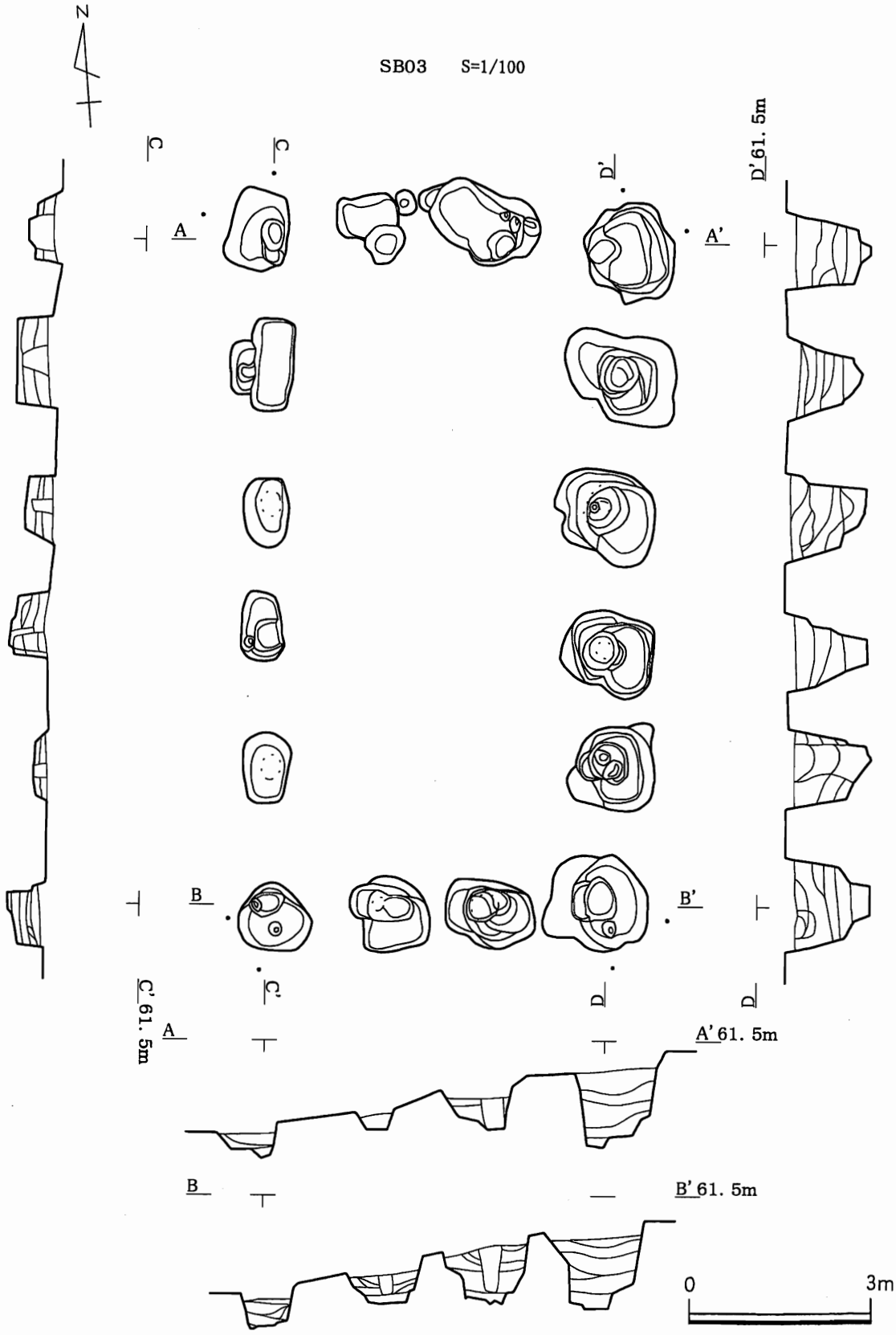
大上周三　1999　「大型建物群の性格について」『古代の大型建物跡　記録集』　財団法人かながわ考古学財団

大上周三　2006　「東国集落遺跡の掘立柱建物の理解」『古代考古学フォーラム　2006　掘立柱・礎石建物建築の考古学－都城・官衙・集落・寺院における分析と研究法－』　帝京大学山梨文化財研究所

松村恵司　2006　「古代の役所を発掘する－古代日本の都と地方」『シンポジウム　古代の役所を発掘する』　川崎市教育委員会



第２図　上麻生日光台遺跡　古代以降遺構配置図



第３図　上麻生日光台遺跡　ＳＢ０３

写真１　上麻生日光台遺跡　古代掘立柱建物跡群

写真２　ＳＢ０３

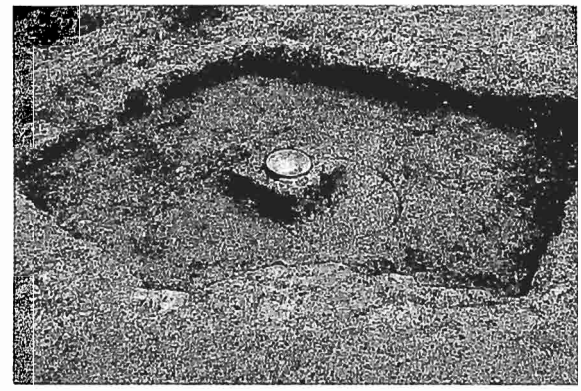


写真３　ＳＢ０６　遺物出土状況

写真４　ＳＫ０４　緑釉陶器出土状況

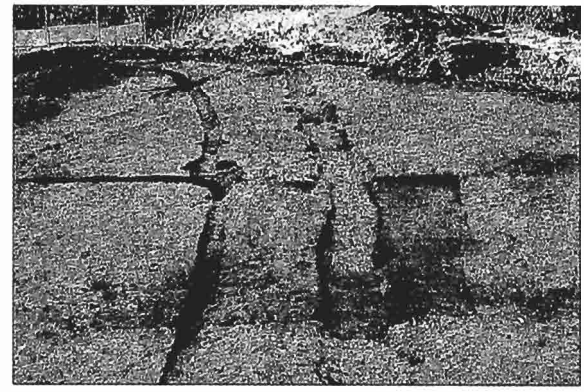


写真５　道路状遺構

小田原市　(仮)早川石切丁場群

―近世初頭、江戸城修築の石垣用材生産遺跡の調査―

三瓶　裕司・依田　亮一・新開　基史・永井　淳

所 在 地　小田原市早川地内

調査機関　財団法人 かながわ考古学財団

調査担当　三瓶裕司・依田亮一（一次調査）・
新開基史（二次調査）・
永井　淳（出土品整理）

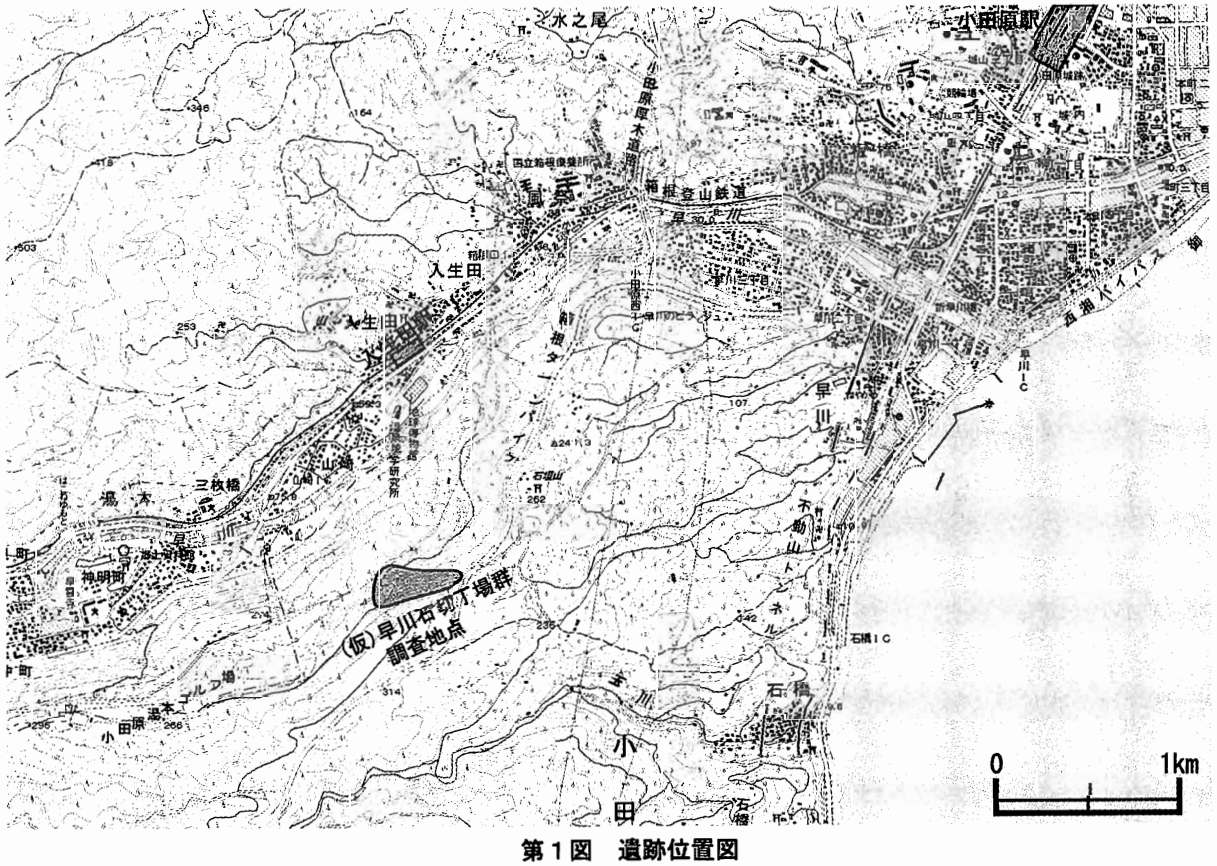
調査原因　広域農道整備事業（小田原湯河原線）
に伴う調査

調査期間　一次調査：2005年9月1日～11月30日
二次調査：2006年2月1日～3月15日

調査面積　3260.4㎡

1．遺跡の立地

本遺跡は箱根登山鉄道入生田駅の南方、約1.2kmに所在する標高180から250mの箱根外輪山の東端部の山腹に立地する。地形的には、早川に注ぐ沢(関白沢)によって深く開析された谷を形成する北向きの急斜面上に形成している（第1図)。現在周知されている遺跡の平面的な広がりは、神奈川県埋蔵文化財包蔵地台帳に記載されているだけでも東西約400m、南北約170mの範囲に展開している。しかし、遺跡全体の範囲は更に大きく広がる可能性が高い（第2図）



第1図　遺跡位置図

2．調査にいたる経緯と調査経過

神奈川県西湘地域県政総合センター農政部広域農道課では、広域農道整備事業(小田原湯河原線)を計画・推進している。計画路線上には(仮)早川石切丁場群(小田原市№264 遺跡)が含まれており、今回計画路線にかかる範囲 9500 ㎡のうち、県教育委員会による事前の分布調査によって確定した 1715.6 ㎡について調査を実施することとしたその後、調査実施中に遺跡の広がりがさらに大きいことが判明したことから、関係機関と協議し、さらに詳細な分布調査を行ない、最終的にはあわせて 3260.4 ㎡について調査を実施した。

発掘調査は、工事の施工時期にあわせ調査範囲を東側・中央・西側と３区分し、2005 年度中に工事が予定されている東側（１区～８区）と西側（18 区～29 区）を一次調査として 2005 年の９月から 11 月にかけて行なった。当該範囲の工事が行なわれている期間については調査を中断し、年が明けた 2006 年２月より残りの中央部分（９区～17 区）について、二次調査として発掘調査を実施した。

一次調査　角石をはじめとする各種切石を切り出そうとする状況を示す作業場(22 区)や、切出し作業が終了したあとに捨てられたコッパや分割礫のみが残された作業場跡などを検出した(23・25 区)。また、調査範囲の西端には等高線に斜行するように山肌を掘りくぼめて構築された道状遺構(24・26 区)が発見されている。

二次調査　丁場の中でさまざまな作業が行なわれている状況を示す範囲（９～11 区）を中心に調査した。そこでは石を切り出すため、自然石に矢穴をうがった状況を示す切出し場、切り出した石の粗整形を行なっている作業場などが発見された。出土した切石には様々な刻印が穿たれており、切石の接合関係から刻印を刻んだ時期に時間差が見られるものも確認されている。また、転石から切石を作出した段階で作業を休止したかのような様相を示す範囲(16 区)を検出した。ここで発見した切石は全て接合関係にあることが判明している。

切石以外の遺物出土は一次、二次を通して非常に少なく、広範囲にわたって様々な作業工程を指し示すようないくつもの石切作業を行なった場や関連施設と思われる遺構が発見されたにもかかわらず、石切丁場の運営年代を確定させうる遺物の発見には到らなかった。

第２図　調査範囲設定図

３．調査概要

石切丁場　代表的な石切丁場としては、切出し作業の最中に遺棄されたような様相を呈する９～11区(幅約30m、高低差約20mの谷状地形の中に無数の切石やその製作剥片が出土している:写真１)

写真１　10区石切丁場全景

や、22・23・25区のようにあらかた石切作業が終了し、必要な切石についてはすでに搬出が終了しているような様相を示す状況(切出しや整形に失敗した石が取り残されている)や、巨大な角石（立方体に整えられた石で、石垣の角の部分に使われることから角石と呼称される）を切り出そうと作業が行なわれていたものの、なんらかの拍子にヒビが入ってしまい作業を断念した様子が見て取れる様相を示す作業場(写真２)や、切石の段階で小

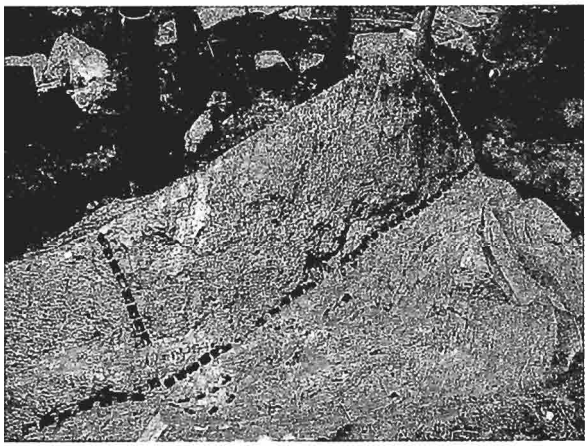


写真２　22区石切丁場(角石製作)

口面に刻印まで穿ち、残りの作業として目的の形に整形するために運び出そうとしている状態で遺棄されている（一部は斜面下方向へ運び出されつ

写真３　16区石切丁場

つあった）様相を示す16区なども注目される。

道状遺構　調査範囲の西側(№24・26)において検出した。急な山の斜面に対し、斜めに３～４mほどの幅を持つ溝を掘り、山体の傾斜に対しやや緩い傾斜角を持つ道につくりあげていることが見て取れる。

道路面にはさらに２本の溝が掘りくぼめられていた。それぞれの溝の幅はおおよそ30cmを測り、溝同士の幅は1.5mを測る。それぞれの溝の覆土中には、小転礫や切石を割ったときに出た、細かな剥片類が充填されていた様子が観察された(写真４)。

写真４　24区　道状遺構(完掘)

刻印など　今回の調査で認められた刻印は「八」、「○」の中に「＋」、「○」の中に「寸」（写真５）の３種である。また、金石文と言って良いものか、

自然面に「此左口」という文字が確認された(写真6)。これは未完で放棄されており、「此左」まで刻み、3文字目に取り掛かった段階で取りやめている。その先何を示そうとしたのか、なぜ作業をやめたのかなどについては不明である。

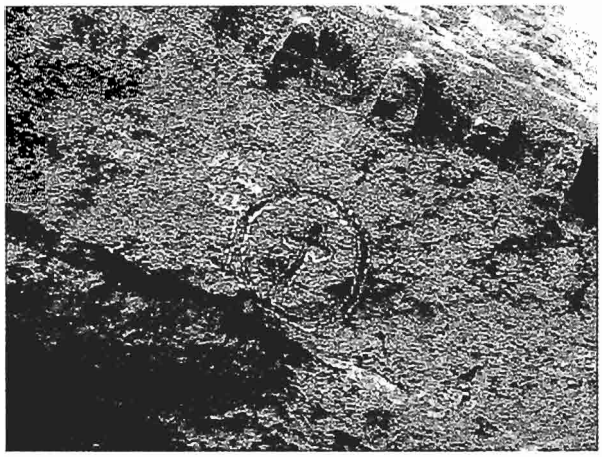


写真5　11区　刻印「○」の中に「寸」

写真6　21区　金石文？「此左口」

矢　穴　石切丁場を概観すると矢穴（石を割る際、あらかじめクサビを差し込むための穴）の大きさには長さがおおよそ 15 cmから6cmまでと幅がみられる。これには年代差や、切り出す石の大きさ・形などの目的による違いであるとする意見がある。その様な中、本遺跡で観察された矢穴の大きさには、ばらつきが見られないということが特筆される。矢穴の底の形状では、台形状、U字上、コ字状などバラエティーを見せるが、こと大きさについては、調査範囲を通して7～8cmの長さを持ち、矢穴と矢穴の間隔にはおおよそ3cm前後の間隔をもつもので占められることが観察されている。

4．まとめ

今回の調査では、29ヶ所にわたる調査範囲を設定し発掘調査を行なった。現状では出土品整理作業の最中であるため、詳細な検討結果を示すことが出来ないが、切石・コッパなどの様相、刻印の分布状況などから、石切丁場としては4ヶ所程度の作業単位にまとまる可能性が考えられる。

一方、切石の作業工程では、①自然石に唾付けを示す刻印、②自然石に下取り線や矢穴を穿った状態、③切石への分割状態、④粗整形を行った状態、⑤小口面に、刻印をうがった状態、⑥搬出待機状態、⑦精整形を行なった状態、などが調査範囲内で観察することが出来た。中でも9～11区では、①から⑥にかけての一連の作業が同一の作業場空間において観察できたことは特筆できる。

また、調査範囲の西端、24区・26区とした範囲から検出した道状遺構は、底部に2本の掘り込みが作られ、その中にコッパ石や小さな転石などが充填されていることが観察された。これは石を運び出す際、地車のワダチとなる部分をあらかじめ舗装していたものとし、この遺構は切出した石を運び出す石曳き(石引き)道である可能性が高いのではと言う考え方が示されている。

いずれにせよ本遺跡の抱える様々な問題については現段階では不明な点が多い。今後の出土品整理を通して文献等の関連する資料調査を進め、解明することができればと考えている。

今回、本遺跡の調査区分で9～11区とした範囲について、関係各機関の努力によって保存整備がなされることとなった。記してご報告申し上げる。

参考文献

内田　清　2001　「足柄・小田原産の江戸城石垣石－加藤肥後守石場から献上石図屏風まで」『小田原市郷土文化館研究報告』№37　小田原市郷土文化館　p.p.1-20